

あなたへ 真実からの伝言

― 感動と生きる喜びを ―

平和の礎

いしずえ

交野在住者戦争体験集

第二集



「平和の礎」第二集発刊に当たって・・・

この小冊子は、第一集発行後、公募に応じられた方々の戦争体験記を収録したものです。

第一集と共に平和日本の礎になられた多くの御霊に捧げ、あなたを始め、現在・未来を生きる方々にお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(会長 可児義明)

目次

発刊にあたって

▽寄稿(五十音順 敬称略)

宇津宮唯男(青山)《原子野を回想して》	3
栗原清美子(妙見坂) 私の戦争体験	8
住井麗子(妙見坂) 残したい母の体験	10
坪井貴美子(郡津) 私の戦後と靴	14
中西英雄(私部西) 私嗚呼忘れ得ぬ満州と幻の終戦顛末記	19
日野耕丸(枚方市伊加賀西町) 私の戦時中の空襲いじめ(受) 体験談	25
前田康(私市山手) 想い出の記『入隊からシベリア抑留のトピックス』	28
増田厚三(私部南) 自分の歩み(子供の頃の夢)	33
簗部みづほ(東倉治) 潮岬空襲、疎開、終戦まで	42
お婆さん(瓜田貞) の体験	48
吉川勝彦(森南) 私の第二次世界大戦争の体験	50
交野の平和と戦争関連モノメントから	52
交野市「平和と人権を守る都市宣言」(日本文および英文)	54
あとがき	

題字 渋谷正

挿し絵 伊坂真三

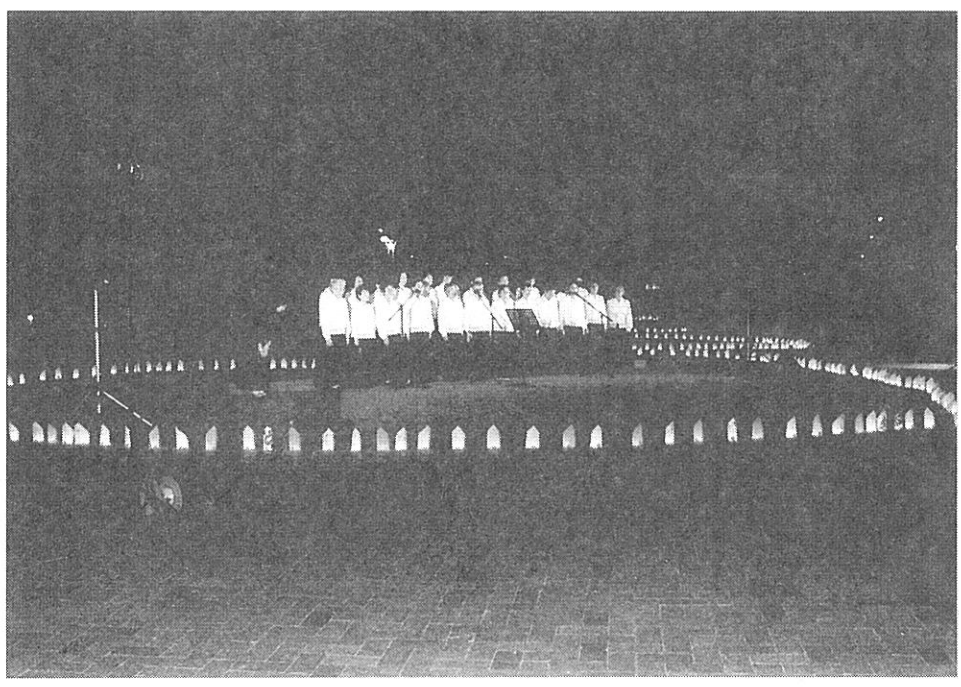
てのひら美術館フォーラム生 木下典子 須藤由為子 高城悦子

林美智子 森本よし子 山田真由美

和久田光子

表紙 「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することば。

花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。



交野市壮年童謡愛国会のみなさん

(平成20年度交野市平和祈念イベントから)

《原子野を回想して》

宇津宮唯男(青山)

ことし八月六日午前八時十五分、六十四回目の原爆忌を迎えます。光陰矢の如し。世の中もすでに昭和から平成とかわり、投下された原爆の日は随分昔のこととなりました。いまでは原爆のことなどすっかり忘れられそうです。

半世紀以上、自分の口から一度も語ろうとはしなかった。が、後人に残すとするならば、どうしても原爆の悲惨な状態を避けて通れないだろうと思う。広島の人には原爆のことを「ピカドン」とよびます。爆発の瞬間に目撃した閃光と大音響とともにおそつてきた爆風を、こんな言葉であらわしたのです。まるで写真のマグネシウムを焚くに似た閃光は、爆心地に近い人はオレンジ色に、離れた人は青色く見えたと言います。

「誰かあ。市内に詳しい者はいないかあ！」軍服姿も凜々しく見習士官の引率士官が大声で叫ぶ。廿日市(はつかいち)駅のホームは列車から降りた人で立錐の余地もなく、だれ一人として応答する者はいない。私は六つ先の駅の海田市(かいたいち)まで帰るのです。「自分があ、行きます！」「おお、じゃあ頼むぞ！」

小隊(約三十余名)と、南洋諸島のトラック島から帰還した従軍看護婦三名は二列縦隊となる。

国鉄の線路に沿うた国道をひたすら歩く。途中、五日市(いつかいち)か廿日市方面?へ逃避して行くのか、すれ違う人達の衣服は油じみてボロボロに破れ、頭髪は逆立っていた。会う人はみんな両手を胸のところにあげており、ボロぎれのような皮膚が手顔で垂れていた。異様なまでに焼き爛れた皮膚が、シャツの破れからもダラリと垂れさがっていた。今にも倒れんばかりに次々と歩いて来る。顔といわず、足といわず、焼けた泥まみれの皮膚は歩くたびに揺れていた。

いままで見えたこともない異様な火傷のあとは、この世にあらわれた幽霊の(お岩さま)のようだ。

「おねがいです。みずを飲ませてください」と、すがりつくように寄ってきた声に驚き、思わず後退(あとずさり)した。私は悪夢を見ているようでした。

夏の陽も傾きかけた午後七時前。己斐(こい)から市電の軌道をたよりに進む。天満(てんま)の鉄橋は犬釘だけでブラブラしている。下の天満川の河原から「へいたいさーん。たすけてくださいーい」。「みず、水をくださいーい」と、幾多の人の悲壮な声。火傷に水は禁物とされていた。

幾度となく呼び止められ、水を求め助けを求められたが、東北

に派遣される見習士官には一刻の余裕すらありません。「すぐに救護班が来るから、もうしばらく元気をだして待つように！」と、慰めておくほかは無かったのでしょう。歩く足元は油のようなもので濡れている。私のすり減った布靴は、夜目にも黒くなり足の裏は濡れていた。これが黒い雨と後で知りました。土橋（どばし）から、紙屋町（かみやちょう）八丁堀（はっちょうぼり）あたり近くと、道々の火災はすでに焼け落ちて洋風の建物が恐ろしくまっ黒な残骸となって残っている。ところどころで残り火が光っては消え、消えては光る。夜風が吹けば異臭が鼻をつく。アッ、人が焼けている。近くの瓦礫の中から断末魔の苦悶の音が聞こえる。途中、瓦礫につまずき、死体につまずき、垂れた電線に足をとられ、やっとの思いで海田市駅にたどりついた。あたりがうっすらと見えるほど明けてきた。

小休止のあと、見習士官と従軍看護婦は始発列車に乗り込む。列車が見えなくなるまで敬礼で見送った。

翌、八月七日（火曜日）一睡もせず寄宿舎の同僚の搜索で市内に入る。昨夜は見え辛く戸惑ったが、広島駅に近い荒神橋（こうじんばし）の欄干は吹き飛んでいた。橋の下にはまるで犬か猫のように、ボロ布のまとわりついた死体が何体も浮かんでいた。福屋付近の舗道には、灼熱の光線をうけて、風船のように膨れた顔の人。髪が焼け顔がくずれた人。みんな大人のようにでしたが、暑

い舗道に一列に並べて寝せられていた。岡山県の救護班の人が、バケツの中にメリケン粉をといたような薬をハケでベタベタと塗っていた。痛さに苦悶する者、声を上げて叫ぶ者、もう見動きひとつしない者もいた。一滴の末期の水さえ口にせず、息を引きとったのであろう。

福屋百貨店のすぐ近くでは、死体収容所の札が立ち、米俵を積み重ねたように死体の山があった。焼けた軍靴を履いているので兵隊ですが、不思議なことにとどの犠牲者も衣類はなく裸同然だった。百貨店の横の焼跡は急ごしらえの焼却場となり、束ねた薪を敷き、重油であろうか死体にかけて焼かれる。次から次と死んでいく犠牲者を、二人の兵隊は手と足を持って、燃え盛る火の中へ丸太のように投げ込む。犠牲者はほとんど兵隊だったと思うのだが、もしかして、あの中にはまだ息のある人がいたのではなからうか？

広島県産業奨励館（原爆ドーム）に近い相生橋（あいおいばし）に遺体収容所があった。十歳前後の男の子が、父親の死体を肩に担ぎ這うようにして運んでいた。紙屋町のほうから来たのであるうか、膝に血をにじませ、汗をびっしょりかいていた。往來の大人は多かった。だが、みんな忙しそうに歩き、誰ひとり声をかけてやる者はいなかった。

場所は今でも定かではないが中島町か土橋町あたりだったと

思う？、言葉で言いきれぬほど、至る所に膨れた死体が無数にあつた。多数の死体の中には女の人も転がっていた。幼い子が無心に遊んでいる。母親の死も知らず眠っていると思つてゐるらしい。ここでも大人は忙しそうに急ぎ足でその場を通り過ぎて行く。先ほどの父親を背負つた男の子。無心に遊んでる幼い子。痛々しく可哀相で後ろ髪を引かれる思いでしたが、無力な私もその場を通り過ぎた一人でした。

投下四日目ごろ、ヒロシマに落とされたのは〈新型爆弾〉と聞きました。〈原子爆弾〉と耳にしたのはかなり後のことでしたが、原子と言われても、無傷の人が突然死んでも、放射能とは何か、認識することは私には全くできませんでした。

相生橋（あいおいばし）の市電の停留所に、リュックサックを背負つたまま、首をうなだれ座つたまま死んでいる。男の人のようだった。炎熱の路上には焦げたキュウリやナスが転がり散つていた。買い出しの帰りなのか里から届けに来たのであろう。哀れな姿になつて・・・。下の元安（もとやす）川や本川では人が流れていく。馬も流れていく。また人が、人が流れていく・・・。長い柄（え）の鳶口で流れていく遺体を浅瀬に引き上げていた。

七日の夜ともなると市内の火災はほとんど消え、松の樹の幹が、その後日もくすぶつていた。まるで死者に供えたお線香のよう・・・。

岡山県の救護班や日赤の人ばかりでなく、肉親や知人をさがす人びとが続々とやって来た。我が身も皮膚を焼かれ教え子を尋ねまわる教師。血に染まった防火用水の中で、消し炭のように焼かれた黒こげの母が、黒こげの子を抱き死んでいた。また娘さんか孫娘を捜しておられたのか、灼熱の光で焼かれた顔では判別できず、焼けたモンペの灰をこわさぬよう、太陽に透かして布地の模様を確かめている老夫婦。目に涙をため老婆は首を横にふつていた。

西練兵場前の舗道では将校であろう、うつぶせで全裸の軀に焼け焦げた長靴（ちようか）を履き、軍刀は曲つて頭の横に転がっていた。

照りつける太陽を遮るものとしてない焼け野原。産業奨励館（原爆ドーム）の瓦礫の中にも顔の焼き崩れた人。焼きただれた軀に無数のガラスの破片が突き刺さっている人。息絶えているのか身動きすらない人。「日本製鋼所の人はいませんかあ！」私は思わず叫んでいた。

前に流れる元安川や本川の水ぎわでは、重傷者が水を飲み腹這いで行つたのでしよう、流れに顔を突っ込んで人の上に人、重なり合つて死んでいた。

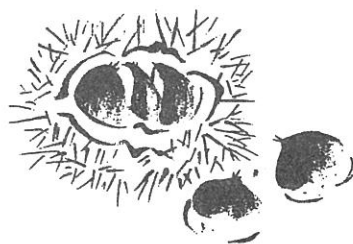
同僚を捜しあぐね、当てもなく歩く舗道のここかしこに、膨れた死体が無数にころがっていた。土橋の交差点に丸焼けで骨だけ

川柳 《原爆砂漠》

- ★ 雲ひとつ無き青空に魔の光
- ★ ヒロシマはこの世の地獄見て 裂ける
- ★ 虫けらのごとく原爆焼き殺す
- ★ 火に追われ逃げたと嘆く夫（つま）捨てて
- ★ 助けてあげて この人息がまだあるよ
- ★ 泥水をうまいと言って息絶える
- ★ ヒロシマは火の海だよと子を案じ
- ★ 血だるまの無惨なすがた眼も焼かれ
- ★ 死んだ子の最後の言葉「もう寝るよ」
- ★ 息のある人もいただる遺体処理
- ★ 神様のいたずらですか生と死は
- ★ 死んだ子を背負う男のむせび泣き
- ★ 風吹けば死臭ただよう焦土の地
- ★ 恥部かくす両手に蛆が這う 無惨
- ★ 川の水飲ませてくれと掌（て）を合わせ
- ★ 原爆はたった一人の母を焼き
- ★ 泪（なみだ）がいっぱいあってよかった 母の死に



- ★ 情けない親の死に目に逢えぬとは
- ★ 神さまを悪魔と呼んでみたい日ぞ
- ★ 荼毘の火へケラケラ狂女笑うなり
- ★ 虫の息かすかに母を呼んでいる
- ★ 風もなく骨の崩れる爆心地
- ★ 原爆砂漠こげたうつわにほねひろう
- ★ 黒焦げにガラスの破片突き刺さる
- ★ 親の骨掘りし少女の細き腕
- ★ 何があっても 壊れぬ石になりたいよ
- ★ 泣き叫ぶ少年母を胸に抱き
- ★ 人間は死ねばゴミだと言った人
- ★ 原爆に打ちのめされた神の国
- ★ 玉音（ぎよくおん）にひれ伏す傷へ蠅が群れ
- ★ 復興へ瓦礫も骨も積み込まれ
- ★ 不自由に生きるケロイド隠しつつ
- ★ 昭和の代（よ）まるごと生きている不思議
- ★ 原爆の惨めさ聞く子涙して
- ★ この疵は煮え湯かぶれば解（わか）るはず
- ★ 戦争はしてはならぬと見せる疵



私の戦争体験

栗原清美子(妙見坂)

私は、一九四四年(昭和十九年)八月に大阪府布施市(現、東大阪市)で生まれました。場所は大阪市城東区に近く、片町線放出駅から歩いて十分余りの所です。終戦のちょうど一年前ですから戦争の記憶はありません。しかし、戦争は、私や私の家族にとって深く傷をのこしました。当時の社会情勢などの知識はありませんが、周囲の人たちから聞いた事や、戦地の父からの便り、戦後、父の戦友からいただいた手紙などから知り得た事を書いてみました。

私の父は、昭和十八年召集され、十二月二十八日入隊しニューギニア沖で潜水艦に沈められ、三十数人だけが周囲の船に助けられ、その中に私の父もいました。上陸後食糧は無く、マラリヤに悩まされ、日本兵は地獄のような中で次々と倒れていき、私の父は昭和十九年十一月十三日、戦病死しました。父の仕事は農業でしたので、現地で食糧生産をするために召集されました。便りにも野菜の種を送れと書かれています。送っても現地に着くことはありませんでした。アメリカの作戦で輸送船はことごとく沈め

られたようです。

私は、その年の八月十九日に生まれました。父も私もお互いの事を全く知りません。父は私の存在すら知らないで、亡くなりました。私の上には三人の兄や姉がいましたが、私が生まれて五日目に二歳上の兄は肋膜炎で亡くなりました。戦争中で薬もなく、二歳になっても歩くことも無く死んでいったそうです。私を出産して間もないのに子供を亡くした母の気持ちを思うと、どんなに辛かっただろうかと悲しくなります。私はこの兄のためにも命を大事にして、二人分生きなければと思います。

ある日、母は私を背負い、三歳上の姉の手を引いて畑に野菜を採りに行った帰り、畑の中の道を歩いていると、一機の飛行機が飛んできて、私たちを狙って撃ってきました。母は姉を抱き近くのポンプ小屋に身を寄せました。幸い弾は逸れ、無事でしたが、「弾が当たれば一番に死んだのはあんたやったなあ。」と言っていました。

私には実際の怖い経験は無いのですが、ひとつだけ不思議な記憶があります。それは自宅の門のところ家族や近所の人が東のほうを見て騒いでいるのです。そちらには黒い煙が空を覆い、真っ赤な炎が燃え上がっています。私は誰かの背中であたその赤い炎を見ているという記憶があるのです。その話をすると、家族は、「そんなこと覚えているわけが無い、家の東の方角にある小学校

に爆弾が落ちて燃えたことがあるが、あんたはまだ赤ん坊だったから覚えていないわけが無い、誰かが言っているのを聞いて見たように思うのだ。」と言うのです。そう言われると確かにそうなのですが、やっぱり脳裏に赤々とした炎の色が今も残っているのです。赤ん坊でも、強烈な記憶はどこかに残っていることがあるのではないかと自分では今も思っています。

母が言うには「終戦の日、日本が負けたと聞いた時、悲しいとは思わなかった。もうB29が飛んでこない、爆弾が落ちてこない、夜電灯がつけられると思うと嬉しかった。」と話していました。庶民の正直な気持ちだったと思います。そして、私たちの苦労は始まりました。農業の経験の無い母も畑に出て、細い腕で鍬をふるわねばならない生活で、いつもくたくたに疲れていたように思います。この年になって、その生活を支えた祖父母、母の心境を考えると胸が痛みます。私はそんなことは何も知らず毎日楽しく過ごしていました。私が母の立場だったら同じようにやっていけたらどうかと思います。今思えば私の子供時代は、本当に貧しい時代でした。はだしで走り回り、粗末な洋服でもみんな前向きで、明日はきつと今より良くなると希望があったように思います。そんな風に生活させてくれた家族に感謝しています。

戦後、JR環状線（当時は城東線）の京橋駅から天王寺方面行きの電車に乗ると、今は高層ビルが立ち並ぶビジネスパークのあ

る所は大阪城の天守閣を背景に、真っ黒に焼けた工場の鉄骨の瓦礫が何年も放置されたままで、それが森ノ宮駅までの景色でした。子供心に見るのが怖かったのを思い出します。

戦争で一番被害を受けるのは戦争を起こした当事者ではなく、多くの一般市民です。この世に多くの人の命を無くしても守らなくてはならないものがあるでしょうか。人には言葉があります。時間がかかっても話し合えば解決できるはずです。愚かな我が人類は今どこかで武器を振り回しています。この愚かさに気付き平和な地球になることを心から願います。



た電車が黒く焼け焦げ、くすぶっていた。橋の欄干にたくさんの人が、しがみついている。随分遠うまわりしたような。日も暮れかかる頃、ようやく家にたどり着く。家は半焼け、ガラスは飛び散り見る影もない。私は、声を限りに叫んだ。『お母ちゃん、お母ちゃん』、暗闇から母のうめき声、母は柱の下に。母を引きずり出す。傷の手当てをするや否や、『家、家が燃えたらいけん』と言って、母はバケツを持って、家を飛び出した。

その時、私を呼ぶ弟の声が聞こえた。『お姉ちゃん、只今、お姉ちゃん。』『ありや、英毅の声じゃ、どうしたん、どこにおるんじや』大声で言いながら、一生懸命探しても、弟が見つからん。学徒動員で、弟は、疎開作業に出かけていた。英毅は八人兄弟の中で私を一番慕っていた。その英毅が私を呼んでいる。「お姉ちゃん、…お姉ちゃん…」 弟は全身真っ黒で、暗闇の中、よう見えなかった。か細い声を頼りに、近づき、やっと探し出して、抱きつくど、皮膚がズルリとはがれて、私の手にぶら下がった。顔は火傷で腫上がり、英毅の顔ではない。

『お姉ちゃん、僕一人だけ、立ち上がったんよ、みんなよう立ち上がらんかったよ。』『えらかった、えらかった。ようやった、英毅は強いなあ。』『素晴らしいながら、そこら辺のありとあらゆる布で弟の体をぐるぐる巻いて。遠くで、【空襲警報】、急いで避難しんさい』という声、急いで、乳母車に弟を乗せ、二人で非難場所

を探して川の上流を目指す。

『お姉ちゃん、熱い、水が飲みたい。』『水は飲んじやいけん、憲兵さんが、飲んだら死ぬ、言うどつた。』弟をなだめながら川へ着く。少し風が通る所でほっとした時、『お姉ちゃん、おしっこ。』ハットした私は、思わず、『そこへしんさい。』『川でする』『なに言うん、そう言うて川の水を飲むんじやろ、がまんしんさい。』大声で怒鳴ると、弟は『うん』と、うなずき、それきり静かになつた。

それで私も、うとうとし始めた。しばらくして朝の気配に目を覚ます。『英毅、朝よ』弟は眠ったまま、『英毅』呼んでも弟の答えはない。気丈な私は、英毅は死んどらん、治療してもらわんと、と、治療を待つ長蛇の列に並ぶ。『だめじゃ、お姉ちゃん、もう亡くなつとるで、はよう焼き場に連れて行きなさい。』そう軍医さんに言われるまで、乳母車を、押していました。

英毅の体から、見る間にうじがわき、まるでうじむしが、弟を食べているよう。『うじむしめ、うじむしめ、』と。とつてはつぶし、とつてはつぶし。

あれから六十年。時は過ぎ、原爆を受けたことも隠して結婚もし、何度も病院に通い、入退院を繰り返し、現在生きています。

原爆は私一人の問題と心に鍵をかけていましたが、娘は二十歳のときにバセドー氏病をかかえ、その後子宮筋腫、卵管摘出、乳

がんと、病を克服し、孫娘までが、小児白血病に。幼い子供が、二年間の闘病生活。孫娘が幼稚園に入るやいなやの時でした。

『ついに出たか、変わるもんなら、変わってやりたい』原爆の影響は、私一人だけじゃ終わとらん、子や孫の代まで現れた。そう思ったことが、原爆のあの日を語るきっかけになりました。今年縁あって、パリのトゥール市の小中学校と、トゥール甲南学園に語り部として、行きました。『言葉は通じにくくても、彦坂さんの手ぶり身振りで、子供たちにも、原爆の恐怖は、伝わりました。』と先生方に言うていただき、うれしい、ありがたい気持ちになって帰ってきました。これからも、核兵器の恐ろしさを、弟や、二十万の人を、一瞬にして、殺されたことを、一代で終わらない放射能の恐怖を。世界中の人々に、伝えたいと、願って、残りの人生をかけて、語っていききたいと思っております。

(彦坂昭子・記)

追伸語り部二世として
二〇〇八年九月十三日から一週間、私と母は、フランスのトゥール市の小中学校を五校訪問しました。

必死で原爆が落とされたあの日のことを語る母。隣で、わかりやすく通訳してくださる元甲南学園トゥール校の先生。真剣に耳を傾けてくれるフランスの先生と子供たち。言葉は通じなくても、心は通じた、と感じるひとときでした。ここまで母と共にこれ

よかった。私は被爆二世として、そばに立っているのみでしたが、核の恐ろしさは、本人一人だけでなく、子や孫まで影響を与えているということ。また平和を求めて核廃絶の願いを伝えるにきた。ということは、わかり合えたと確信し熱いものを感じ取りました。そして、平和の鶴として、子供たちと共に鶴を折りました。子供達は、第二次世界大戦の授業の一部として私たちを受け入れてくれ、ジャポネ、ヒロシマ、サダコ、と、という言葉が、口々に聞こえてきました。たどたどしい手つきで鶴を折り喜んでくれた子供たち。心が通じ合うひと時は、本当に、ここまできて、よかった、と、感じる幸せのひとつでした。

どこの学校でも、大変丁寧に接していただき、各校長先生方から次の様な言葉を頂きました。

「フランスは核保有国です。パリにも核施設が幾つかあります。核汚染は、目には見えません。その恐ろしさを、あなた方は、トゥールの子供達に、伝えるにきてくれました。この子供たちが大人になって、核の選択を迫られた時、二十万人の人を一瞬にして殺す核を選ぶか、平和を求めて、話し合いで解決すべきかを選ぶか、その時、この子供達は、今日のこの日のあなた方が遠く日本から覚えてきてくれるでしょう、その為にあなた方が遠く日本からやってきてくれたことに、本当に感謝しています。」

と、言っていた頂きました。来てよかったです。日本の悲劇を繰り返

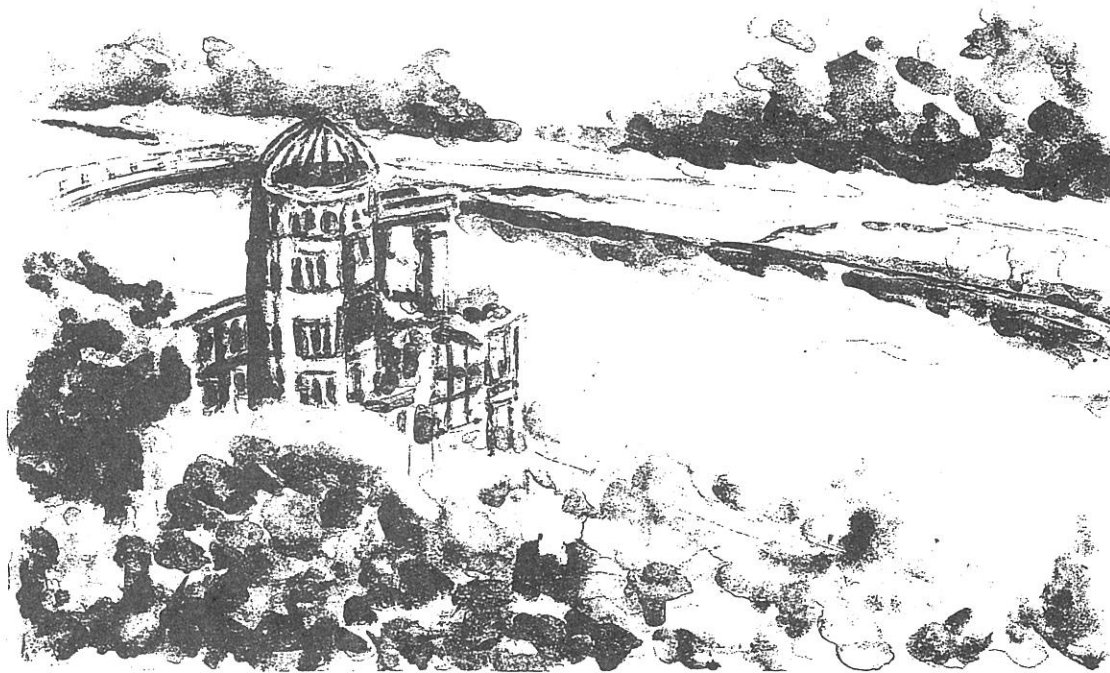
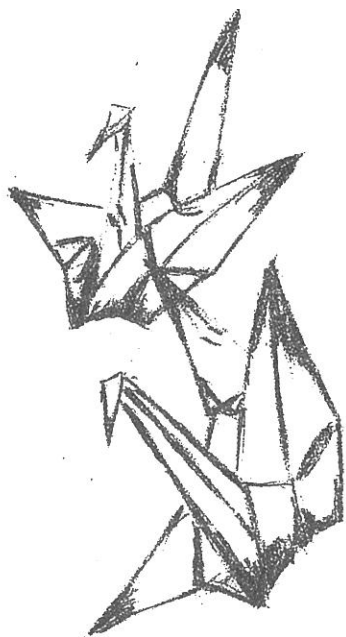
返してはいけない。「ノーモア広島」「核廃絶」を、この私達の祈りは、フランスの人にも伝わった。

そして母は残り少ない人生を生きている限り声を大にして、原爆が落とされたあの日のことを語り、世界のどこへでも行って、未来の平和を築く子供たちに会いたいと願っています。

この気持ちを込めて今日、この交野の人々へ母の話をお伝えでき喜びをかみしめています。

また、この気持ちを受け止めてくださった「平和の礎」の編集委員の皆様には本当に感謝いたしております。

ありがとうございました。



私の戦後と靴

坪井貴美子(郡津)

私が十五歳の八月十五日に、敗戦になった。

五月より三ヶ月、家を離れ、福知山のグンゼ和知工場に、学徒動員で行っていた。戦争には負けても、家に帰れる喜びは、言葉に言い表せなかった。

でも、その後は、衣食住のない人も多く、たとえお金があっても物が無い。皆、何でも配給である。死闘である。

九月より二学期が始まる。今までの動員服でなく、セーラー服が着られるようになるが、セーラー服など売っていない。父が昔の電通に行っていたので、古い制服が柳行李にしまっていたのを、母が出してくれたので、丁寧に解いた。アイロンなどないので、板張りをして、先輩のセーラー服を借りてきて、見よう見まねにセーラー服を自分で作った。有り難いことに、私は動員で、動力ミシンを使い海軍服を縫っていたので、足踏ミシンはお手の物である。でも、家にはミシンなど無い。母の友人の家にあったので、そこで使わせてもらった。白線も入れた。私なりに上々の出来であった。でも、白布のタイが無い。そのうち父がどこから

か落下傘の白い布をたくさん貰って来てくれた。真っ白で柔らかい。それで、立派なタイが出来た。嬉しかった。その布で、ミシンを借りたおばさんに、ブラウスを作って御礼にし、隣のお姉さんにもブラウスの型を取って差し上げた。昔の人は、ミシンがなくても手縫いで立派に縫えた。飾りミシンは、私がかけた。皆は喜んで下さった。自分ながら十五歳でよくやったと、今振り返って思う。

今は、物があふれ、人々は考える力をなくしている。

もう一度、人は貧乏になれば、知恵が出る。心は感謝をして、前に向かつて、歩くべきである。

私は今、女子少年院に二十年、マナーを教えに行かせてもらっている。平成十六年には、法務大臣賞を頂いた。

普通のことをさせてもらっているのに、本当に有難いことである。感謝である。家ではお茶お花を教え、皆に、考える力を、もう一度思い返して欲しいといつも言っている。

苦労すれば知恵が出ることを、そして感謝を。

いよいよ二学期である。セーラー服も出来上がり、喜ぶのも束の間、靴がない。今まで何を履いていたのかは、定かでない。思いつけない。父が二、三足、自分の革靴を出してきて、これを履けとのこと。父の足は小さかったが、男性である。私とは、二、三種は違う。それに男物である。嫌だったが、履くものが無い。

仕方なく、靴修理のおっちゃんに頼んで、後ろの踵を高くしてもらい、靴紐を替えてもらい、靴の先に綿を詰め、学校に履いて行く。交野線は一両で、混んでいるので足は見えないが、私は京都の学校だったので、京阪線は、三両の急行で空いているので足が気になる。また、学生ばかりの電車なので、余計に嫌である。空いていても、絶対に座らず、座ると前の人に足が見えるので、いつも立っていた。男の人達は、軍隊の払い下げの靴を履き、ゲートルを巻いている人が多かった。でも、少女の私は、辛くて辛くて、早く学校に着きたかった。上靴は藁ぞうりを、それも自分や祖母に作ってもらったのを履いていた。はだしの子もいた。学校が終わると、一目散に帰って、靴を脱ぎ去ると、気が落ち着いた。本当に疲れていた。

親が気づいたのか、一、二ヶ月後だったと思う。父が、靴を買いに大阪に行こうと云ってくれた。その時の嬉しかったことは、今でも鮮明に覚えている。これで解放されると……。

戦後まだ二、三ヶ月なのに大阪は早、闇市が出来ていて、ボツボツと店があった。難波の方だった。目的の靴屋も一軒あった。渋い柿色の靴が並んでいた。色の種類など無く、なめしそのままの皮に、磨きをかけたようなものだった。私は、二十二糎なのに二十三糎しかなかった。父が交渉してくれたが、この寸法しかないとのこと。靴屋のおじちゃんに、「おじようちゃん、これからだ

んだん足が大きくなっていくので、靴の先に綿を詰めて履いとき」と、言われた。私はせっかく買うのに、また綿か、と、がっかり。でも、女物なので嬉しかった。帰りに父が、闇市のうどん屋に連れて行ってくれた。出てきたうどんが、なんと緑色であった。私はびっくり。父が「これは海藻や」と、言った。粉は配給のためであった。それでも満員であった。浅ましかった。食べたか食べなかつたのかは、今、味も思い出せない。家でよく足で踏んで作っていたうどんの方が美味しかった。靴の箱などはない。風呂敷に包んで胸にしっかりと抱いて帰った。帰ってきてから、綿を詰め、何回も何回も、家の中で、履きまわったので、母に叱られた。明日の学校が、楽しみで、なかなか寝付くことができなかった。枕元に靴を置き。その時の小遣いは、一ヶ月三円であった。靴も女物を履くようになり、気分も、るるんだった。

お正月も近づき、宿題は書初めである。書道の筆を、二円五十銭で買い、靴も女物を履いているので、彼方此方と歩き回った。小遣いも五十銭しか残らなかつたが、お正月には、お年玉が貰えるので、淋しくなかつた。私は、一月四日が誕生日なので、お正月の食べ残しばかり、誰も祝ってくれない。そんな時世ではない。皆食べるものは配給なので、必死である。今のようなケーキやパンなどサラサラ無い。価値の高い筆で、書初めをするしかない。一生懸命に、紙もないので新聞紙に裏表真つ黒になるまで書いて、

学校から三枚ずつ半紙を頂いていたので、それに書いた。

三学期に入り、女物の靴を履いて機嫌よく行くと、校門に私の書初めが、優秀の作と、書いて貼ってある。嬉しいよりもびっくり。その後、書道が好きになった。「弘法筆を選ばず」というが下々の私たちは、やはり良い物を持つと、心の入れ方が違う。大事にもし、大切に、気持ちが違うことを見つけた。その後、書道の成績も上がった。

私は、四年生で修了して、美専に行った。その時に、生まれて初めてアルバイトをした。羽子板の裏に梅の絵を描くのである。見本を見ながら、何百本も描いて百円貰った。嬉しかった。父方の祖母と母方の祖父が健在だったので、二十円ずつ持って行った。涙を流して喜んでくれた。

今私はその恩を受けている。孫が今年、初めてもらった給料から、おじいちゃんおばあちゃんにと一万円ずつくれた。本当に幸せをかみしめた。昔の祖父母の気持ちが変わった。私は本当に幸せを人様より受けている。甥や姪からお年玉を頂く。私のような人は、世の中に多くいないと思う。有難いことである。子供たち夫婦、主人の兄、姉、私の妹達夫婦、社中の人達も、結婚してまた遠くへ帰った人達も、「先生の顔を見に来た」と来てくれる。本当に幸せな日々である。今教えている人達は、十年以上の方ばかり、私は、若い人にエネルギーを頂き、元気にさせてもらって

いる。皆は本当に可愛い。今、私は、恋をしている。四人というて良いのか？一、お日様。二、神様。三、お花（植物）。四、人様。今年は、今まで以上に幸せな年を、頂いた。感謝。

話は元に戻るが、美専の時は、その他に競馬の支払いのアルバイトもしていたので、自分の自由なお金は持っていた。一番最初に買ったのは、やはり靴である。三ヶ月ほど、貯めたお金で、千八百円の靴を買った。服は、はぎれを買って、靴に合わせて自分で作った。服代は、あまりいらなかった。そして、靴から上になかなか上がって行かれない。靴ばかり買って、何足も持っていた。一番思い出の靴は、「パンプス（今のヒール）」。ほしかったので、友人に言うと、友人の父が、いつも作ってもらっている店があるというので、連れて行ってもらった。今の天満橋駅の前の坂を上ったところに、天満屋という靴屋さんがあり、オーダーの店だった。そこで、足に合わせて、パンプスを皮ばかりで作ってもらった。本当に目が出るほど高値だった。でも足にぴったりの合い、人生が変わったような気になった。外人のPX（進駐軍のデパート、日本人は行かれないところ）に連れて行ってもらった。見るもの見るもの素晴らしいところだった。色々な品物が山とあった。日本はまだ配給なのに……。私は美専を二年で中退して、コンドル洋裁学校に通っていた。

卒業のテーマで、スーツを作ることになっていたので、その靴

に合わせて、スーツの服地とコートの生地を二着買った。それはそれは軽く、美しい渋い二着だった。そして靴下も買った。履いているか履いていないかわからないような靴下だったが、外人のサイズで大きかった。今のナイロンだったと思う。父にタバコ、母にマフラーを買って帰った。一銭もなしのピンチだった。

コンドル洋裁学校の卒業には、立派なスーツとボックスコートを提出して無事卒業した。本当は、デザイナーになりたかったが、時代が悪かった。今だったら時々思う。私は、二十二歳で結婚した。その後も、大事に靴と服は着ていた。二回の引越して今は無い。でも、この間、古いアルバムを整理していたら、二十歳の時のコートとパンプスの写真が出てきた。思わず写真にキスをした。書きながら本当に懐かしい。写真は今横に置いている。デパートに行っても、目に付くのはやはり靴である。私は靴を買って服を作る。人は服に合わせて靴を買う。私は反対である。

今は、自分の体を支えてくれる足には、敬意を表して、お風呂に入ると、いつも有難うと言って五十回ずつ指先をもみほぐす。感謝をしながら。

六十歳の時に、妹と二千八百メートルの七面山に登った時も、足に合った靴を買い、八百メートルまでは自動車だったが、後二千メートルは足で登るのである。三時間ほどで登った。足はいっことも疲れなかった。目の前に、富士山が顔を出して下さった。

旅館で作ってもらったおにぎりとおしんこの美味しかったこと。私の一生であんな美味しいものは今までもない。おにぎりをかぶり、妹と二人で涙した。幸せだった。平和な日本に感謝した。

先日ふと、美しい靴屋さんがあったので入ると、九千八百円の靴と、五千八百円の靴が上下棚に並んでいる。店のおじさんが、履いてみて下さいと言って下ろしてくれたので、片方ずつ二足履いた。やはり高い方は、暖かく、足に良く馴染み気持ち良かった。「靴を買う時は、両方履いて歩かなあかん」と言ってその通りしてくれた。私が買う気になると、「奥さん、なんぼにして欲しい？」と言われたので、「え？」と私が聞き返すと、「自分のところで作っていて、大丸や伊勢丹に卸しているので、大丸に行ったら一万八千円を出ている。」と言われた。「神戸の震災で崩壊に遭い、この店を友人に借り、出している」と、色々話を聞いて、お気の毒にと思った。「原価は七千三百円やけど、タバコ代二百円だけおくれ」と言われた。気に入ったので、買うことにした。立派な箱に入れてくれて、艶出しと磨く布をもらい、消費税も出さずに帰った。なんだか嬉しかった。短いブーツだ。家に帰り、箱より出し下駄箱に入れると、主人の靴が上段の片隅にあった。

今、主人は、脑梗塞で倒れて私が介護をしている。今日は、デイに行く日である。行っている。もうこの革靴も履くことはでき

ない。そつと出して、足を入れる。六十何年か前の父の靴を思い出し、一步、また一步と歩く。一筋の涙が頬を伝った。今の幸せな自分をかみしめながら、また一步。感謝感謝の日々である。

「戦争は二度としてはならない」

苦しむのは我々国民である。自由の喜びを忘れず、感謝をして、努力して、頑張ろう。

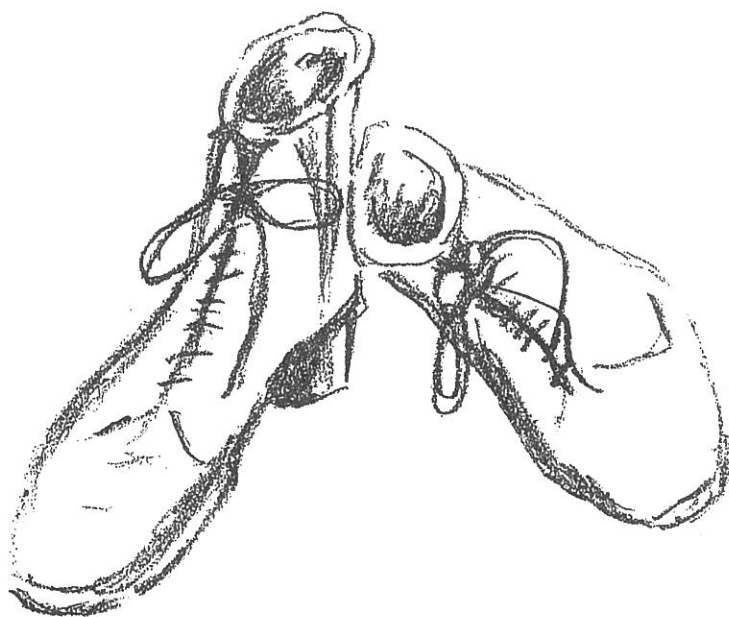
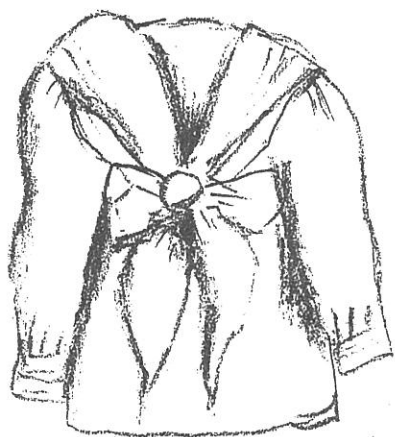
八十路に近い私も、もう靴を買うこともない。足が痩せたら、また綿を詰めて履くだろう。

幸せをかみしめながら、老いていく。有難い。

今日は私の誕生日。孫にもらったデコレーションケーキ。

「おばあちゃんおめでとー！」と、八本のろうそくを吹き消す。皆の喝采を浴びる。

「ありがとう！ しあわせー」



私嗚呼忘れ得ぬ満洲と幻の終戦顛末記

中西英雄(私部西)

光陰矢の如しと申しますが、月日の立つのは早いもので、終戦後六十四年を経過した訳です。

私も年が明けたら八十一歳になりますが、私の在満時代とか幼少時代を公表するのは、もう最後かも知れません。其処で私なりの解釈で、自らの生死をかけた波乱万丈の私の人生をタイムスリップして、皆さま方に貴重な体験を発表したいと思えます。

昭和維新新時代到来の幕開けと共に、私は香川県の片田舎に生を受けて育ちました。昭和四年頃は物騒な農村恐慌で始まり、世の中は不安がいつばいで、然も満洲事変、二・二六事件、支那事変と、そしてもう既に全面戦争になる気配が濃厚でした。

こうした不景気とは裏腹に、我が家では祖父、祖母、父母、兄弟みんな健在で、何不自由なく幸せいつばいの生活をしておりました。四国山脈に面した我が家の前方の山々は、四季がはつきりしていて、山紫水明の地形で四季折々には季節風が吹いて、春夏秋冬の時節の到来を告げてくれました。こんな時でも油断すると、人間誰しも生死の程は一寸先は暗闇で、不慮の災難がつきもので

す。従いまして、人の人生の運不運は五里霧中で、何時奈落の底に落ちるかわかりません。

私は昭和九年五月半ばの時ですが、生命の危機がありました。近所に住む友達と蛙取りに熱中していて池に転落、そして目が覚めたら近所の座敷に緋の着物を着て寝ていました。友達の通報で両親が駆けつけて私は助かったのですが、私の命は風前の灯火でした。その当時、水仙の花が池の周囲にいつばい咲いていたのを記憶しております。そこで私の母は、我が子が水泳が出来ない事をよく知っており、一度ある事は二度ありで、今後近所の兄ちゃんと絶対遊ぶな、そして二度と近所に遊びに行くなと云われ、以後二度と遊びに行く事をやめました。それから三年後、母が昭和十二年六月二十七日、私の実家の西側の下にある大きな溜池へ雨が降る中、洗い物に行き転落して水死。これが私達兄妹二人の永遠に母と子の別離でした。私は小学校三年で九歳、妹は五歳、その時母は二十九歳の若さでした。今でも時々思い出しては可哀想でならない、さぞ無念であった事でしょう。でも私達親子の絆は今でも健全です。しかしながら母と子が水に溺れて死んだり死にかかったり、何かの因縁かもわからないが、私には合点がいきません。

その母が死んで十日程して支那事変が勃発して、大勢の日本の兵隊さんが中国大陸で戦死したり、怪我したり、狭い村里でも犠

犠牲者が続出して、てんやわんやで子供心に一日でも早く戦争なんか中止して、平和であって欲しいと云うのが国民の待ち侘びた心境ではなかったのではないだろうか。間もなく父親の再婚で私達兄妹の前途は暗闇で、夢も希望もなくなりました。

それから五年程して大東亜戦争が勃発したのは昭和十六年十二月八日でした。日本は愈世界中を相手に戦闘開始。日本の軍部は一億玉砕してでも戦争に勝たねばならぬ、と云うきつい大本営発表の指令でした。

当初六か月は勝ち戦でいい調子だった後は総崩れになり、昭和十七年四月頃から戦禍の拡大で、志願兵募集の話題が寄るとさわると、学校内や村民の間でも持ち上がっていました。学校へ行くと自分達の担任の教師が先頭に立って、頻りに教え子に向かって、お前達もこうした国難の時機にお国の為、天皇陛下の御為に御奉公せねばならぬ、と寄るとさわると口説くのでした。政府は未成年者でも国家存亡の危機に少年兵を採用する為、躍起になっていたのではないか。私達の学級から私を含めて九名程が志願する事になり、高等科二年在学中の昭和十七年十二月三日、高松の佛生山公会堂で試験を受けて、目出度三名合格。私は海軍電信兵、A君は海軍航空隊、B君は海軍水測兵でした。明るる年、私は昭和十八年三月二十日に高等科二年を卒業してから就職。赴任先の満洲ハルビン満鉄江運技術員養成所の機関科に行くことになり、昭

和十八年五月一日に入所しました。またA君は現在の北朝鮮の鴨緑江の水力発電所に入所、B君は何処へも就職せず自宅待機して、召集令状待ちして本人宛に来た召集令状を貰って、自宅から村人達がB君の祝入隊の幟を立てて、大勢の人達の歓呼の声に見送られて佐世保の海軍部隊に入隊したとか聞きました。まあとにかく昭和十八年度の安原尋常小学校の卒業生の中から、栄えある合格者三名は同期の桜として、お国の為に名誉ある日本海軍の一員として、愈出発した訳ですが、私は残念乍ら病気で入隊は出来ませんでした。また、A君は終戦後無事元気で故郷に復員して帰国しましたが、もう一人のB君のその後の消息でわかった事は、昭和二十年六月朝鮮海峡で宿敵アメリカの潜水艦の攻撃で、名誉の戦死をしたと聞きました。当時十七歳で立派な最後でした。

一方私は昭和十八年四月二十八日香川県庁前からまず山口県の下関まで行って、関釜連絡船で朝鮮の釜山へ行き、其処から全員奉天で集結しました。メンバーはみんな満洲国内の全域に就職する満鉄関係者ばかりで、それぞれ分散して行く事になり、私はハルビン行きの四月三十日の夜行で、昭和十八年五月一日就職先のハルビン駅に早朝着いて、各自四名は送迎車で無事養成所に到着しました。そして、白系ロシア人町の一角にあるキタイスカイ街にある満鉄江運技術員養成所の機関科に入所しました。それから三か月間養成所で頑張っていました。私達はその当時ボート

漕ぎとか江上訓練をした松花江の地形は川幅千米の上に鉄橋があつて、その車線を走るチチハル行きの列車が運行しており、対岸にはヨットハーバー、また反対側にはハルビン造船所がありました。その松花江の中程に突出した中洲続きに大陽島があつて、其処で養成所の若者達が毎年夏期訓練を行っていました。小休止の時間帯にみんなで松花江の貝を採取して、味噌汁の具にして食べました。その貝を食べて私は中毒を起こし、昭和十八年七月七日にハルビン駅前の大和ホテルの横にある満鉄病院の六病棟に入院しました。大体一か月程で中毒症状は全快しましたが、今度不幸にして急性肺炎になり（悪疾症状）結局翌年二月五日まで長期入院する羽目になりました。従いまして長期間生死を彷徨い、入院期間中誰も郷里から見舞いに来てくれず、兵役は病気で逃れでもこんな所で死ぬのかと思うと情けなくて、四六時中ベッドの上で悶々の日々が続く、精神的にも肉体的にも堪えられない。若くして死んだ母の事を思うと涙が出て止まらない。

故郷から三千八百キロ離れた北満の地へ何故来たのか、今更後悔しても仕方がないと思うようになりました。毎日の入院生活が息苦しくて、ついハルビン駅まで気分転換で買物に行ったり、また気紛れに時々病院の庭園にある胡桃の木めがけて、石を何回もぶつけて落して食べるのが日課になりました。どの木も十五米位の大木で余程体力が無ければ無理で、投げて石が届かない。

しかし乍ら実が熟すると美味しいのでよく食べたが、今更乍ら六十年前の事を思い出してみて、よくも現在まで長生きして生活出来るのは不思議な気がするが、持ち前の根性で生きて来た事を誇りに思う今日此の頃です。

しかし乍ら七か月間と云う長期入院中に、実は昭和十八年九月上旬、私にも日本の海軍省から養成所を通じて召集令状がきました。が入院中の事として兵役が免除になりました。そして二月五日から三月末日まで養成所で養生し乍ら頑張り四月一日から心機一転、ハルビン鉄道局内の北満江運局総務部文書科にある、無線電信の暗号解読業務に転向。そして道裡の青年隊舎から本局近くの寄宿寮に入り、本局で当分頑張る事にしました。仕事場は十階建の二階で毎朝朝礼を行い（五族協和）の個条書きした条項を、みんな毎朝宣誓を行っていたように思います。

満洲国内に於いて満鉄は国内全域に列車を運行しており、国内には五大民族（日本・中国・白系ロシア・朝鮮・モンゴル）と多民族が住んでいましたが、でも主導権は日本人が握っていたから大丈夫だと思いますが、私達若輩者ではよく分かりませんでした。そして、私達日本人は従来通り昭和二十年八月十五日まで働いておりました。私は相変わらず暗号解読業務で頑張っておりましたが、私は鼻を悪くして仕事が出来なくなり、昭和二十年七月二十日から道裡にあるハルビン日赤病院に入院して、両方の鼻を手

術したのですが、充分治らずに八月十四日に退院させられました。殆ど治っていたが充分とは云えないが分からない。

八月十五日には従業員全員集合して、天皇陛下の玉音放送を聞きました。我々日本人は日本に帰れず、今後の身の振り方に苦慮して全員涙乍らに悲嘆にくれていたのを記憶しております。

終戦になって二週間位すると中国人の炊事のボーイの密告で、日本人は此の頃あやしい武器を集めていると云う架空のデマをソ連兵に告げて次々と日本人狩を始めたとか聞きました。私達はハルビンからソ満国境まで連行されて行きましたが、ただ私は運良く難を逃れて居残りで行かずにすみ、牡丹江で三週間位捕虜になって鉄条網の中で缶詰になっていました。そしてやっとハルビンに帰り、また此の零下四十度の寒さでは（昭和二十年の年）到底越せないと会社側が判断して、愈々撫順へ行く事になりました。

此の際北満の地ハルビンとはどんな所か説明しますと、ハルビンは彩都国際都市としては有名で、五大民族の人達が住み大変綺麗な街です。夕方になると何か所かあるキリスト教寺院が奏でる鐘の音に、キリスト教信者達は徒歩の途中でも立ち止って、その方向に向かって黙禱して最後までお祈りしていました。

またハルビン神社なんか終戦後間もなく無くなりました。ハルビン市内の道路は殆ど全部石畳で、雪が降っても積らず、スケートリンクの如くで、気を付けて歩かないと転倒してなかなか起き

られない。冬は零下四十度、夏は摂氏四十度になり、気を付けないとすぐ結核になります。酒を飲んで道路で寝たら死ぬか、肌が出た所は凍傷で肌が腐って死の宣告を受ける事になる。また毎年十月二十日過ぎになると、各家庭に於いては二重窓の硝子窓に目塗りを行います。厳しい冬の寒さを迎えて対処方法として、硝子窓に土を練って隙間に塗るのです。

北満江運局の人達は十月下旬から一週間の予定で撫順に行く事になり、私は撫順に行けばもう二度と馭頭へ行けないと思い、一寸散策したところ終戦までは伊藤博文公の銅像がありました。聞くところによると伊藤博文が明治維新の初代内閣総理大臣であった事を最近知りました。また此の馭頭で朝鮮人に襲撃されて殉職した事は、国史の勉強した時に先生から聞きました。

我々満鉄社員一同は愈々永い間住んで居たハルビンを後にして、撫順の新屯に行き、元気な者が一昼夜交替で働き八か月頑張つて、翌昭和二十一年六月末にコロ島経由で東舞鶴に帰り、各人の故郷に帰った訳です。

撫順ではソ連軍・中国軍・国府軍が撫順市内で勢力争いをお互い繰り返して、市内で発砲するので昼間でも危険でした。日本人は少しでもこうした戦禍から逃れて早く帰れるようにと、マツカアサー元帥に働きかけて、努力してくれた奇特な日本人がいた事を

私は最近の新聞報道で知りました。多分今年の春四月頃に在満日本人の救出に關した事項をトップ記事で見ました。終戦の翌年の昭和二十一年三月頃、在満日本人の人達五・六名が戦後の日本政府の吉田総理に、在満日本人救出の陳情に一月もかかって、あらゆる手段を講じて、日本本土に來た事が書いてありました。

その当時満洲では日本人百二十万人の人達が今日の食事に事欠く有様で、満洲の在留邦人が一日でも早く日本に帰って來てもらう為に、帰国した人達が先ず一番に総理大臣吉田茂氏に相談したところ「私では駄目だ、私がアメリカの進駐軍總司令官マツカアサー元帥を紹介するから、貴方達一行で談判する以外に日本人を救出する事は出来ない事だ。」と云われ、吉田総理は早速マツカアサー元帥に仲介の勞をとってもらい相談したところ、心良く引き受けてくれて、進駐軍司令官マツカアサー元帥所属の軍艦と飛行機の支援で、国府軍を増強して満洲に軍隊を派遣して解決した事が書いてありました。

この人達の努力がなければ私達の帰りが遅れて、若しかしたら私達も中国大陆で死んでいたかも知れない。こうした人達の努力のお陰で私は昭和二十一年六月三十日にコロ島から東舞鶴に帰り、やっと郷里に帰りました。香川県の高松に七月二日に到着しましたが、高松市の街は昭和二十年の五月にアメリカ軍の爆撃で丸焼けで、高松から地方へバスが出ないし、仕方がないので徒歩

で十五キロの道を頑張つて帰りました。私は全身痩せて体重は三十七キロ。栄養失調の体でふらふらでした。その上疥癬と虱だらけで生家に帰り着きました。その後家庭の事情で実家に一年半居て結婚。私は十九歳、家内は十八歳でした。

水田を二・五反貰つて、現高松空港にあった国营開拓地に入植。電気も水道も六年間無しでランプの生活、私は一升ビンを提げて灯油を買いに行きました。そして六年後には電気もついて井戸を掘り解決しました。

開拓地で十二年間働いて、その後昭和三十四年三月まで尼崎の長州に五年余りいましたが、その当時は敷金三万円、アパート代三千円の家賃も払えない生活でした。それでも四苦八苦して小学校五年生を頭に三年生と一年生と三人の子供を養育するのは大変でした。私は三十一歳、妻は二十九歳でした。

寝屋川では十年間に四回引越して、やっと昭和四十九年九月には現在の住居に移転して約三十五年になりました。その間私は我武者羅に働き破天荒な生活で、子供達と一緒に懸命に頑張つてきました。

私達の結婚生活もやがて六十二年になります。私の交通事故で早期退職したり、会社での重大事故やら、また不治の病で現在家内は病院に入院して頑張つております。私達夫婦も現在満身創痍でやがて此の世からおさらばで、そろそろ終焉になりかけてい

ますが、私がペンを取るのも最後だと思いよく考えて書きました。
それでもこの世から消えるまで夫婦共々お互いに頑張つて努
力して有終の美を飾りたいと思います。



私の戦時中の空襲及いじめ(受)体験談

日野耕丸(枚方市伊加賀西町)

私は、昭和十年十月二十五日生れの七十三歳の老人です。日本の敗戦は、昭和二十年八月十五日、当時私は、国民学校四年生(十歳)でした。天皇陛下の玉音放送を聴いた時には、子供心に涙したものです。天皇陛下のお言葉の中で今だに忘れられない言葉が御座居ます。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」です。

昭和十九年春、私は、大阪市西淀川区に住んで居りました。当時の私の家族構成は、父は、軍属として南方のジャワ(の造船所に)行つて居りました。母、姉、私(長男)次男(国民学校二年生)参男(二歳)の五人家族でした。大阪もB二十九やロッキードの空襲が(一トン・二トン爆弾や焼夷弾が雨・霰の如く地上に落下)激しくなり区役所から田舎(両親の出身地が岡山縣笠岡町)の有る人は、強制的(問答無用)に強制疎開(戦争の被害を少なくする為に都会の人を地方に転出させること)をさせられました。

当時の我家は、木造二階建てでしたので爆弾や焼夷弾を浴びると周辺の家屋が殆んど類焼するのです。私の家も木造二階建てでしたのでタンク(戦車)でワイヤロープ(鉄のつな)で家を倒し

て行きました。住みなれた家が暇も簡単^{いと}に倒れて行く様は子供心に大変悲しかった事を覚えております。昭和十九年春大阪駅から鈴なりの汽車に乗り、岡山縣浅口郡笠岡駅に約八時間かかったと思います。田舎では、当時母の両親が健在で、ささやかな農業をやつて居り農機具を保管する小屋で生活をしました。田舎でも食糧難で毎日毎日、芋蔓が食糧でした。敗戦(昭和二十年七月頃)直前、私の身長一四六センチ・体重四十二キロ位しかなかった。超小型なひ弱い子だった。戦時中でも現在と同じ様に「いじめ」がありました。都会の子、都会の子(当時笠岡での国民学校は、男子は、男子校・女子は女子校と別れて居りました。)と「いじめ」られ毎日泣かされていた。こんなチビでは、田舎の子は私より体が大きく力も強いので私では勝てる訳がありません。しかし私も男の子です、今にみておれ!この無念と屈辱はきつと晴らしてやると思つて居りました。当時私は栄養失調で鳥目(夜は自分の周辺は全く見えません、但し、百メートル先は見えるのです)になり祖父が蛇(マムシ)を捕つて来てそのマムシの目玉を二個飲んだ途端に鳥目が治つたのです。嘘の様な本当の話です。

今では懐しい思い出です。敗色濃厚な昭和二十年六月頃、山陽本線の岡山縣の西はづれ(笠岡町)にトンネル(そこを越えると広島縣の大門町)が有り、そのトンネルの近くに墓石を作る工場

が有りました。トタン屋根の下で生後、間もない赤ちゃんが、寝ている時にグラマンの奇襲攻撃にあい赤ちゃんが即死をしました。毎日毎日、上空にはB二十九(大型爆撃機)やロッキード(中型機)やグラマン(小型機、日本のO戦に似ている)が、日本の上空を我がもの顔で飛来していた。

敵機が襲来すると、役場が空襲警報発令のサイレンを鳴らし、人々は防空頭巾を被り防空壕に(山のほら穴)避難したものです。毎日毎日が、こんな日常でしたが、ついに八月十五日(連合国、曰く日本国民に対し、暑中お見舞申し上げます。)ポツダム宣言を受諾し無条件降伏をした訳です。子供心に涙したもののほつとした気持ちも有ったと思います。だって毎日毎日空襲警報のサイレンで逃げ隠れる必要がなくなったのです。敗戦の日を界に空襲がなくなりました。敗戦から三年後、昭和二十三年に元、大阪に住んでいた場所を訪ねたら一面焼け野原でいっけんの家も有りませんでした。悲しかった事を記憶しております。敗戦から一難去って又一難、日本国中が超食糧難時代に突入した訳です。私は口に入るものならなんでも口にしました。父(七十二歳で死去)のお蔭で私(七十歳)はなんでも戴きます。昭和二十二年の夏に父が南方のジャワから帰国したのです。まさか生きて帰って来るとは想像もしていなかったので本当にびっくり致しました。幽霊が立っているのかと思いました。父曰く、昭和二十年八月十五日

敗戦と同時に原地では武装解除になり、日本人は、原地に殺される危険があったので即ジャングルに逃げたとの事です。

それからジャングルに逃避する事、約一年野豚・蜥・蛇・蛙・等口に入る物ならなんでも食べたとの事、それも火で焼くと煙が立ち日本人がいるとわかると、おそわれて殺されるので火は使わなかったそうです。それからオーストラリアの兵隊につかまりシंगाポールで約一年間捕虜収容所に収容され敗戦から二年後(昭和二十二年夏)に日本に帰国しました。一年間のジャングル(日本の山間とは想像が出来ないとの事)で生死をさまよっていると人間は強くなれるとのことです。食べものであれが嫌いこれが嫌い、言おうものなら即座に「びんた」が飛んで来て殴られたものです。昭和二十一年だったと思いますが、学生改革により国民学校が普通の小学校になり新制中学になった訳です。私も昭和二十三年に新制中学の一年生になり、警察官道場(柔道)に入門し(当時は全国の警察官丈はGHQ(マッカーサー司令部)から柔道と剣道は許可を受けていた)中学三年・高校三年の合計六年間を、小柄故、人の二倍三倍も練習をして、ついて行くのがやっとでした。

私も努力を重ねて初段を取得しました。平成二十年十月十五日(水)十九時から四チャンネルのテレビをご覧になった方もいらっしゃると思いますが松野明美さん曰く、私は体が小さい為人

の二倍三倍も練習をしたとの事です。私も柔道で、心・技・体と根性を鍛え強い男子になりました。国民学校時代に都会の子、都会の子と「いじめ」た奴らに今度は私が、その子らにお礼参り（しかえし）をしました。当時はルール（規則の様なもの）が有りませんでした。「いじめ」にあっても絶対に親や先生に喋らなかつた。男子たる者、強きを挫き弱きを助ける。義を見てせざるは勇なきなり。強くなる為には心技体と根性を鍛えてもらい度いものです。子供時代に戦時といじめ（受）を体験している丈に今日の平和は、過去の大战で日本国の為に戦死された兵隊さんや、犠牲になられた民間の方々のお蔭です。御冥福をお祈り致します。現在、こうして生きている事に、大変幸せを感じます。

平成二十年十月二十五日（土）（奇しくも私の七十三歳の誕生日）十五時二十分、八チャンネルにて「硫黄島からの手紙」のテレビを見ていると、涙が止まりませんでした。



想い出の記『入隊からシベリア抑留のトピックス』

前田康(私市山手)

私は昭和十七年一月から入隊する昭和二十年三月まで西のパリーと言われた満州国ハルピン市に本店を置き、日、満、支間の貿易及び販売(食品、酒、ビール、建材雑貨)を手広く行っていた光武産業(株)に勤務していました。

昭和十九年戦局の悪化に伴い、これまで徴兵検査は二十歳で甲種合格者だけが現役入隊していたのが、この年から十九歳で検査を受け第三乙種まで現役入隊することになりました。

昭和二十年三月十五日にハルピンの郊外の香坊(ハルピン麦酒の大きな工場があった)の外れに所在していた関東軍第四三七〇部隊(第一装甲列車部隊)に現役歩兵新兵として入隊しました。昭和二十年八月に終戦になり、関東軍将兵は牡丹江市郊外の海林の陸軍弾薬庫の跡地に集結させられ、私達は二十年十月中旬に、牡丹江駅からシベリアに捕虜として送られ、昭和二十二年十月に送還されて舞鶴に上陸しました。帰国輸送船は病院船の高砂丸でした。帰国抑留者の宿舎で身体検査を受けましたが、身長が一七五センチ、体重は三十七キロでした。

舞鶴に造られたシベリア抑留記念館や多くのシベリア抑留体験記、最近では日経新聞の「私の履歴書」に載った小堀遠州流の小堀宗家の手記等を見たり、読んだりをしてきましたが、記念館では抑留生活の悲惨な場面が旨く造られて居り、またそれぞれの手記はその作者が体験した抑留生活の悲惨で、残酷で、ひもじい想いが書かれています。それを見、読んで、その度に痛切に思う事は、造られ、書かれた事は本当にその通りだが、「何かが違う」、私達が体験したシベリアの抑留生活とは「何かが違う」という思いがしてならないのです。

この私の手記が二年間の抑留生活を克明に書いたら、同じ抑留体験者が読まれたら、俱らく私同様、書かれた通りだが、「何かが違う」あのシベリア抑留生活の本当の状況は文章で表現される様な奇麗事では絶対になかった、と思われるだろうと想像します。何が違うのだろうか? 正確にここが違うという事は文章に出来ない様な気がします。唯僅かに考えられるのは、ハルピンの生活でも零下四十度は何べんも体験をした。軍隊でも一期の検閲までの非常に肉体的に厳しい訓練、内務班における古年兵の理由のない私的制裁でつらかった事が何遍もあった。しかし満州国へは私の意志で行った事。厳しい軍隊生活も戦時下の軍国青年としての自覚、誇りがありました。

それに対してシベリアの抑留生活には自覚も誇りも何もなか

った。在るのは唯一つ、何がなんでもかんでも、隣の者が亡くなつても、自分だけは一日でも早く内地（日本）に帰りたい。現在の生活では到底考える事も、望む事も、実感することも出来ない程の望郷の念の毎日の生活は、画いたり、造つたり、作文することは一応は出来ても身体の奥底から、頭から足の先までに充満した望郷の念の中でのシベリア抑留生活というものは、実際にこの様な環境の中に身を置くことではしか分明しないものだと思ひます。丁度アウシュビッツ、ユダヤ人収容所の出来事の実態はそこに身を置いた時始めて本当の感覚が分ると同じ様に。

その事が「何かが違う」と感じるもののように思ひます。

こういう感覚を前提に置かして頂いて、入隊した部隊、海林の収容所、シベリア抑留生活をトピツク的に書いてみたいと思ひます。

入隊した部隊

昭和二十年三月に関東軍第四三七〇部隊（第一装甲列車部隊）に歩兵初年兵十六名の一人として入隊しました。直ぐ隣接して第四三七一部隊（第二装甲列車隊）があり、緩やかな丘をはさんで戦後生体実験で有名になった、防疫給水部隊の石井部隊が高い塀に囲まれて在った。ちなみにこの部隊の建物は敗戦の日（八月十五日）に非常に高い煙突と諸共に爆破されました。装甲列車部隊

と言つても殆どの人には見た事も知識もないと思ひます。

簡単に説明しますと大砲、高射砲、重機関銃で武装した蒸気機関車です。

四三七〇部隊の装甲列車の編制は、先頭又は後方に機関車、炭水車、それに牽引されて電源車、指揮車、十センチ加農砲車、十五センチ榴弾砲車、高射砲車二台、重機関銃車で、別に弾薬、食料車（生きた豚まで）を積載する有蓋貨車多数で編制されて広大な機関区がありました。部隊の人員配置は部隊本部、歩兵、砲兵、工兵で部隊長片桐少佐以下二百三十名程度で、関東軍百万の精鋭と言われた多くの部隊の中で尻から二番目の小さな部隊で、隣の四三七一部隊が一番小さな部隊でした。

私達歩兵は各人に三八式歩兵銃と更に重機関銃が四二銃があり、他に擲弾筒分隊がありました。この部隊の作戦指令は機動力を生かして満州里からシベリア鉄道に入り、これを制圧することでした。日ソ友好条約がソ連により一方的に破棄された時、部隊長が部隊全員を前に「日ソ友好条約の破棄により、いよいよ最後の時が来た、これからは毎日を有意義に楽しく過ごそう」と訓令された事が印象に残つて居ます。

海林収容所

牡丹江の郊外に在った広大な敷地を持つた弾薬庫跡の土塁に

隔てられた弾薬庫特有のバラックが、主に北満州の関東軍将兵の収容所となり、間もなく内地へ帰る列車に乗る日を待っていた。数日ごとに千人単位で牡丹江駅から列車に乗る為に収容所を出て行った。残った者も皆順番が来れば帰国列車に乗り、内地へ帰れると信じて居ました。

しかし誰言うとなく、内地へ帰るのでなく捕虜としてシベリアに送られるらしいとの噂が広まり、一抹の不安を抱く様になりました。

こんな雰囲気の中である日、肩から参謀肩章を吊るした参謀が来て、周囲の兵隊を集め「自分は帰国列車に同乗してウラジオストックまで行き、帰国船に兵員が乗込んで出港するのを確認して来た。皆は間違いなく順番に帰国出来るので安心して待つ様にと説明がありました。

この参謀がどんな意図でこの様な説明をしたかは分明ではないが、軍隊の中での参謀の言葉は絶対で、噂は消えたが結果的には参謀にだまされ、噂が正しかった訳でした。

牡丹江からシベリアへ

牡丹江は山下奉文大将が軍司令官だった軍都で、海林から徒歩で牡丹江へ向う途中、周囲の山々の横腹に、ことごとく地下トンネルが掘られて軍の施設が造られていました。二十年十月二十日

頃に牡丹江駅から有蓋貨車に乗せられ、その時シャベルや十字鍬が沢山積み込まれるのを見て帰国船に乗るのに何故こんな物を積み込むのか疑問に思ったが、ウラジオ近くでソ連の戦勝記念塔を建設して居り、日本兵に帰国に際してその建設工事を手伝って貰ってから帰国船に乗って貰う、との通訳の話で納得しました。夜遅く出発したが、貨車の僅かな隙間から見ると列車は確かに南方向に走っているので安心して寝たが、明るくなって外を見ると今度は反対に北へ北へと走っているのではないか。皆が「列車は北へ走って居るぞ、だまされたシベリアへ送られるのだ」と完全にだまされた事を悟りました。

エスベスコワ(?)からモシカへ

抑留生活から六十年余、年月の経過と私自身の加齢と共に、地名や年月日の記憶がおぼろげになって居るが、確かエスベスコワまで列車で、そこからはスチュード・ベーカーの大きなトラックと徒歩で途中二カ所の収容所に宿泊し、最後にモシカ地区(日本のブヨに似た吸血虫モシカが猛烈に多く群生している)の地名になった様だ)の収容所に入った。モシカ地区には相当離れて三ヶ所ほど収容所があり、モシカまでの途中十一月三日に徒歩で行進していたが、既に寒さが厳しく、その上吹雪になり非常に難渋したが、十一月三日は明治節でこの日は晴天の特異日と言

われていたもので、日本が負けたら天に神も仏もなくなったのか！と嘆いた記憶があります。

私達の四三七〇部隊は二百名足らずの少人数で移動単位に達しないので他の部隊に分配され、モシカの收容所に入った時には原隊に居た戦友は古年兵の上等兵唯一人、他は全く知らない人達ばかりで、その点でも随分心細く作業の割り振りにも割を食う事が多くありました。

風呂と虱

香坊の部隊を出てモシカの收容所に入った時は既にシベリアは厳寒の冬、漸く寒さがゆるむ兆しが感ぜられるまで、約七ヶ月間、施設、環境、厳寒の条件下では一度も風呂に入る事が出来なかった。モシカから更に沿海州寄りにウルガール炭鉱があり、鉄道が通って居たが、独ソ戦の為レールが全部撤去されてヨーロッパに送られたとの事で、我々捕虜がこの鉄道復活の為の枕木を製作する木材の伐採作業に従事したが、シベリア松の松ヤニが手や顔に付き、それに焚き火の煙が、又ストーブのススが付いて垢と一緒にになって炊事場勤務以外の者は猿顔負けの真黒の顔をしていました。七ヶ月間程風呂に入らない状態を想像して見て下さい。この様な状態の上に更に四人が一つの二段ベッドに寝る時もある下着も含め全然着替える事なく過ごせば当然「虱」が猛烈に発生

しました。

一匹一匹取っついては切りがないので闇夜の中でほのかに赤く燃えている四角のストーブの天板の上に衣服をかざしているのと、熱さに耐え切れずに虱が下に落ちると天板に赤い点がポ、ポと光る。文章にすると或いは幻想的と言えるかも知れないが現実には悲惨な状況であり、昨晩寝る時まで生きていた隣の兵が、朝何の前触れもなく冷たくなって居り、虱が一匹も居なくなっていた、と言う様な事が珍しくない状況でした。

食欲と性欲

人間の二大本能、食欲と性欲、正常な状態であれば当然な事として受け入れられている。シベリア抑留記では、先ず食欲が質と量が人為的に極端に貧しく、極端に少量とされた。その結果作業の休憩時や寝るまでの時、話題になるのは決まって郷里の名物料理。食べ物のお話ばかりで「女」の話は全然出た事がない。人間食べる事がなければ色気（女）もないと言う真理を悟りました。

二年後高砂丸のタラップを昇ると、白衣の看護婦さんが並んで出迎えて下さいました。その時「ああ日本の女の人はこんなにも美しいのか」と思いました。この時分には、環境にある程度適応し、食事も改善されて居た様に思います。

民主主義運動

シベリア生活になつて相当の期間、旧軍の階級制がそのまま保持され、兵役期間と、星の数による圧力が環境が厳しい中で尚一層強く發揮されており、この制度のせいで亡くなった例も多くあった様に思います。どこから派遣されて来た左翼系？のオルグによる民主主義運動が始まったのは何時だったかは分明ではありませんが、共産主義の教育と旧軍制度の撤廃運動でした。共産主義については、この悲惨で極端にひもじい食事で何が共産主義だと思つた者が殆どだったと思いますが、旧軍制度（階級制度）の撤廃には殆どの者は大いに賛成で、オルグの後ろにはソ連の力があるので急速にこの制度は崩壊していきました。スターリン大元帥にお礼状を書かされたのもこの時でした。私自身この事が生きて故里の土を踏む事が出来た大きな要因だと今でも感謝の念を持っております。

パンの分配

極めて貧しい食事の中でパンは一番の生きる為の糧でしたが、一日朝食に定量が三五〇グラム（ノルマ達成度で減量。後半ではノルマ制は緩和された）支給されましたが、高粱粉の水分の大きな黒パンを炊事班が一室人数各に目分量で切り分け、実に簡単な秤にかけて小さく切つたパンを一つ又は二つと木串で乗せてい

る。水分の多い黒パンなので大きさに微妙に差がある。毎日替る係が自分の室の人数分を持ち帰つてから分配する方法がいかにも抑留生活の貧しさを、公平とあきらめを維持する方法によつて行なわれます。先ずパンを板の上に何列にも並べます。二段ベッドの上から真剣な目でどのパンが一番大きいか（目方ではない）を見ています。次に係が今日はこのパンからと指定します。今度はベッドの人の人の中の人を指名します。指名を受けた者は何番ベッドの右上と指名します。これでこの指名を受けた者が係が指定したパンを取ります。この後はベッド番号の次の者が次のパンを取つて行きます。人の手で分配されるパンの大小ですが、この分配方法では、どのパンが当たるかは全く分らず、不足を言えない公平とあきらめの分配方法です。自然に考え出された方法ですが、ベッドの上から食い入る様にパンを見ている姿、究極的な分配方法を考え出したのが共に成人の男子。現代に生きている人々に考えられるでしょうか。これがシベリア抑留生活の悲惨さと残酷で無情さを如実に表して居る事実だと思ひます。

荒れた日本海を渡り甲板から「日本だ」との呼びに甲板に駆け上がりました。波静かな舞鶴港とそれを取り囲んだ緑の山々。「日本だ。帰つて来れた。嬉しい」正に感無量、ほほを流れる涙と共にシベリア抑留生活が海のかなたへ消えて行きました。

自分の歩み(子供の頃の夢)

増田厚三(私部南)

昭和三年五月、自・小作農家に二男として生まれた。養蚕が唯一の現金収入で、その他の人も、大同小異、自給自足で、地域共同体の助け合いが部落の単位であった。食用油を取る時、一年間ツバキの種を集めたものを持ち寄り、蒸し器で蒸して、木で作った絞り器で絞るのである(菜種油も同じ)。味噌、醤油、豆腐、こんにやく等総て自家製品であった。

昭和四年、ニューヨークの株の下落により日本経済が破綻し、生糸の価格が暴落し、現金収入の道は、半減した。世界恐慌の嵐は、人身売買にまで発展し、不景気は長く続いた。町に自転車店があり、親子二人暮らしであったが店も倒産し、娘を他県の遊廓に売って、借金の穴埋めにしたとか。義務教育六年だったので、六年から女中、丁稚、漁師の下働きなど、貧乏なるが故に十二歳で家を出て働く者の悲しさは、想像を絶する涙があったであろう。

昭和七年頃、この部落に電灯が点いた。5Wでもとても明るく、夜の来るのが楽しみであったが、電気料が高くなるから

と言って夕食時二時間のみと、母が決めた。夜なべと云って、夕食後の仕事があり、ランプの明かりで父は俵編み、母は明日の支度、兄は藁草履作り。九時頃になると、母は、黒砂糖の固まりを一つ小指位のを起きている者に配った。これが唯一の楽しみで、起きていて手伝いをした。

電気が点灯して一か月過ぎる頃、電気料金の集金人がくる。その人は、海軍の下士官服を着て軍帽をかぶり、革靴を履いた清楚な感じの人だった。僕を見ると、何時も海軍の話をしてくれて、海軍の電気科に入れば、下士官になれば、電検3種の免許を貰い、五年勤めれば電力会社に勤め、電気を集金人に成れる事。海軍の連合艦隊の様子、各港に寄港した時の特産物、お菓子、羊羹の配給など、憧れの数々を聞くごと、海軍に志願し、五年経って後、電気を集金人に成ろう。この時、自分の進路を決めた。昭和十年頃だった。

青少年期の歩み

昭和十二年支那事変が始まった、小学二年生である。この年国家総動員法が施行され、兵隊検査で合格した者や予備役の軍人が召集令状(赤紙)によって召集されるようになった。毎日のように出征していく人の見送り、役場の前にコンクリートで40cmの高台を設け、六人位の出征兵士が立って挨拶。再び生きて帰る事はない覚悟で、天皇陛下の為に命を捨てることは男

子の本懐であるなど、死に赴く挨拶である。お国のためにしっかりと頑張ってくれ、など郷軍人や地域有力者が励ましている。音楽が鳴る。「わが大君に召されたる、命はえあるあさぼらけ」とか、艦隊勤務の歌とか、最後は「海ゆかば」で終わり、「〇〇君万歳、万歳」と叫びながら、日の丸旗、軍艦旗を振る。そのうち乗合バスが来て、旗の振られる中を通り車中の人となる。子供だったが寂しかった。その頃お米が配給制度となり、自分の家で作った米は総て供出するよう役場から通達があり、持っている田の面積に応じ、組長の所に割当台帳がある。割当を守らないと、村八分になるのでヤミ米を買ってでも供出した。畑作は自由だったので芋、麦、野菜をつくる。主食は、芋、麦であり、副食は、漬物、野菜物であったが、夜明けから暗くなるまで働くので、食事の準備等の余裕はなかった。

小学六年になった。学校もあまり勉強をしなくなり、運動の時間が増加。父は「読み書きソロバン、さえ出来ればそれで良いんだ」と、楽観的で、勉強せよ、勉強せよ、と言われないのが不安だったが、どうせ進学も出来ないし、軍隊に取られて行く者だから、と思つたのかもしれない。当時の担任は、陸軍中尉で、軍服を着、階級章を襟に付け、指揮刀を腰にぶら下げた青年将校であり、一時間目は、修身（今の道徳）で教育勅語の暗唱を強いられた。暗唱の出来た者から出征兵士を送る旗作り、

姫竹取り、と、自由時間だった。一生懸命覚えた、遊べるから。

殆どの生徒は覚えたが二、三の者は覚えられない。鉄拳が飛ぶ、そして「放課後残つて覚え」と、厳しかった。次は、君に忠に父母に孝に、の説明。天皇は親であり、命を投げ出してご恩に報いなければならぬ、など、忠孝一本の道徳を説いた。昭和十五年になり、日、独、伊、三国軍事同盟が結ばれた。

産業報国会が出来、治安維持法により、不平不満を言う事を禁じた。戦争に行つた家の入口には、誉れの家と書いた札がはられ、取り入れや芋掘り等各種団体が手伝いに行つた。鍬を担ぎ、軍歌を歌い、上級者が長となり、隊列を乱すことなく目的地に行くのである。母は常に、自分の事以外見て見ぬ振りをせよ、上の人には逆らつてはいけない等、忍耐の必要性を教えたが、この世の中の仕組みはこうなんだ、と何の疑問も湧かなかつた。昭和十六年、大東亜戦争が始まった。小学校六年から翌年国民学校となり、高等科一年となる。支那事変の時は、南京陥落だといつて紅白饅頭を貰い、夜は提灯行列だといつて町全体が部落ごと行進してお祝いをしたが、戦死者の遺骨が帰るようになり、段々と殺風景になつた。

国民学校高二の春、十四歳となる。担任の先生は何時もニュースを聞かせてくれた。大本営発表の戦勝ニュースである。手を叩いてよろこんだ。そして大東亜共栄圏を作る為、海軍は、

若い君達を必要としている、先輩も軍人として君達を待っている、と言われ、体格の良い生徒一人一人を個別に喜んで海軍志願を勧めた。自分の様な何も知らない者でも、国の為、天皇陛下の役に立てるのだ、と決意をして家に帰り、母に言ったら、母は涙を流してその場をはなれた。

次の日クラス十五名の志願者があつまった。電気の集金人になろう。だが涙による母の抵抗、結局黙って受験する事にした。昭和十七年ミッドウェイ海戦において、日本は敗北し、連合艦隊壊滅状態と成ったのに、国民に知らせるのは「勝った、勝った」であつた。

十五歳の正月もおわり、十五人中五人が合格し、五人に採用通知が来た。通信二名、機械二名、一般水兵一名であり、通信の二名は二月に横須賀海軍通信学校に行き、後の三名は、五月である。「昭和十九年五月二十七日佐世保相浦海兵団に入団すべし。佐世保鎮守府」と書かれてる。周囲の人から、おめでとう、と祝福の言葉である。この頃、陸海軍共に 戦死者の遺骨が帰ってきた。遺骨入れの白木の箱の中身は故海軍一等兵曹として 真ん中に、大きく名前が書かれているのみである。出発に際し、送別会をして貰った。お餞別も大分貰ったが、総て母に渡した。役場の町長が、三人を佐世保相浦の海兵団まで見送りをしてくれた。行列を作って何百の人が入口に並ぶ、受付の

下士官が、書類を見て「佐志機30194」と言う。この番号が、海軍に在籍する限り、自分の名前となるのである。何番から何番は、何兵舎、と番号で書かれている。その中に入ると、何番から何番は何教班と、これからこの番号が自分なのか、と忘れてはいけない物を貰った気がした。

突然ピーという笛が鳴った。号的といって、これが鳴ると、その場に起立しなければならない。「今から被服を渡す」と言われ自分の兵籍番号の前に行くと、衣納袋が置いてあり、開け、紺の服が第一種軍装で、白が二種、草色が三種など色々教えてくれた。「着てみる、一種軍装だ」と大声で言う。紺の服を着るまえに、自分が今まで身につけていたもの総て脱ぎ、全裸となって支給品に着替えた。小包で持ってきたもの総て送り返した。「教班長殿、服が大きくてだぶだぶです」と言うと「小さい者が居る筈だ。取り替えしろ」、また「靴が大きい」と言えば、「足を靴に合わせ」と言われ、交換とか何とかで一応落ちついた。

号的が鳴り、「今から、潜水学校の入校テストを行う」と言うてそれぞれ座り、国、数、作文を書き、「今から呼ぶ者は、前にでろ」と言われ、二割位の者が前にでた。身体検査に行くといつて、助手の兵長が引率して、医務室に行き、終わって個人面接を受けた。

面接官は大尉の階級章を付けた初老の特務大尉で、海軍に志願した動機、そして電気の集金人の話をした。よし、といわれ、分隊に帰ったら、名前を呼ばれた者は、明日の夜行で広島の潜水学校に行く、と言われ、今までとは別の班になった。食卓番、吊り床の揚げ下ろし、遅いといつては、尻を野球のバットのよくな棒でなぐられる。一通り海軍用語を教わるが、二度と教えてはくれなかった。聞き忘れて、もう一度聞くと「貴様、弛んでいる」と言つて往復こぶしでなぐられる。広島行きの班には、何も言わず、ほっとしていた。夜、同級の友と、別れの挨拶をしたが、彼は寂しそうであった。テストの結果が悪く、一緒に行くことが出来なかったのかも。彼は三か月の海兵団教育を終え、横須賀海軍工機学校に行った。もう一人の水兵は、三月の新兵教育を終えて艦船に乗り、帰らぬ人となった。

潜水学校に着き、二か月して一等兵になった。電気練習生という事で、六か月の猛訓練が始まり、テストの点が悪いといつては殴られ、動作が鈍いといつては殴られ、毎日が恐怖の連続であった。練習生も終わりの頃、艦勤実習がある。イ152、156、154などの実習で、80m位潜航する。電池の比重を計る。電動機、発電機等、海底に居ると、酸素が少なくなり汗がでる。息苦しくなる。浮上して、甲板に上がった時の空気の美味しさ、磯の香は、今も忘れられない。

昭和十九年六月、イ号33潜水艦が訓練中、伊予灘で沈没したことを軍極秘の筈なのにうすうすと知った。「総員死にかた用意。東に向かい天皇陛下に最敬礼、海ゆかばの合唱。艦橋より電声管で何かを伝えるが浸水の為終わりなのだ」と、下士官が話してくれた。

イ号33潜水艦は、一度事故で沈没し、南方から曳航されて呉に着き、修理を終えて、十九年六月、伊予灘にて訓練中、事故を起こし沈没したが、原因は、急速潜航した際、指令塔に各部所から「用意良し」の報告があり、出揃った所で艦長が命令を出すのであるが、後部ハッチの係も、一ぱい閉めた出入口の窓の枠に木片が挟まれたのも知らず、報告をしたのが原因だと引き揚げられた後にわかった。

艦内の浸水は、その窓の下より流れ込む。下は、電気、機械、兵員室であり、その区画だけ閉鎖されたが、機械、電気室は浸水し、浮上は前部の電池だけである。繰り返し浮上を試みたが微動もせず、艦長は伝声管を通じ、浮上不可能を伝え、下士官一名兵二名を魚雷発射管より脱出させた。生きて70mの海底より浮上する可能性は1%位あったと、艦長は考えたのだろう。六月十四日翌日、愛媛の漁船が波に漂う下士官を発見し、漁船にて処置、助かったが、他の二名は行方不明だった。艦は、百三十四名と共に伊予灘の海底に永眠したのである。戦後引き

揚げられ、勇敢な遺書が油紙や瓶に入れられ、お母さん、そして、天皇陛下万歳と、結ばれていたとか。

二十年正月、八か月の教育を終了し、呉、佐世保、横須賀に分れ、各基地隊に出発する。私は呉潜水艦基地だった。次の船が帰って来たら、乗組員の交代であり、帰る艦を待つのが基地隊員なので、これといった仕事はなかった。そのうち、五十名ばかり名前を呼ばれ、ダイハツ（上陸用舟艇）に乗せられ音戸の瀬戸の突端大浦に、第一特別基地隊といって特殊潜航艇の基地がある浮き栈橋経由、倉橋島のおおさこに着いた。ここは特殊潜航艇の講習所であり、基地にいる半数が将校であり、少尉、中尉が多く、その他は下士官になったばかりの甲種飛行予科練習生出身の二等兵曹であった。自分達の分隊は下士官、兵の集団で、特殊潜航艇五人乗りの蛟竜隊で、厳しい勉強だった。

上等下士官から上等兵まで一緒に講習員なので、上下関係を余り気にしなくて済んだのが、幸いであった。一蓮托生の言葉もここで知った。将校は回天の講習、予科練は海竜の講習、それぞれ同じ基地で訓練をしていたが、場所が狭く、回天の基地を徳山の沖、大津島に移し、広くなった空き地に回天の部品が運び込まれ、組み立ても本格化していった。

課業整列の後、南の空1万m位の上空にキラキラ光るB29の三機編隊が無数飛来して来た。「空襲、空襲対空戦闘用意、

総員配置に付け」の伝令の声。基地内は、銃を持って走るもの、機銃を高台に据えるもの、呉軍港からの在泊艦船の艦砲が、轟音とともに打ち上げられる、雨の様な爆弾が呉上空に達した。音ととも、という音と同時に土地が揺れる、兵舎の窓ガラスが音を立って割れる音、防空壕より見る実戦。これが本当の戦争なのだ、と大人の戦いを見た。機銃手が撃たれた。すぐ次の者が交代して銃座に着く。負傷者は担架に乗せられ、応急処置室へ急ぐ。自分は予備員で、各部署で求めに応じ応援に行く係であったが、今でいう男たちの大和の戦闘場面そのものである。その日の昼、まだ戦闘配置のままなので、戦闘食が配られた。二ギリ飯二個にタクアン二切れ。

翌日、呉の被害について教員が話してくれた。海軍工廠は全滅でまだ煙の中だという。呉湾に居た艦船は殆ど沈められ、浅瀬に乗り上げた艦首が菊の紋章を上にした姿は、悲愴なものだったとか、電池栈橋に着くと、海には死体が浮かび、内部でも死体があふれ、死体処理の工員や警備団の人が放心状態で処理していたとか、修理していた潜水艦も爆弾被害で、当分修理が必要だろうとか。

五月が来た。操舵、通信、電気、機械、それぞれの十三期生の別れ。靖国で会おうと握手を交わし、栈橋へ急ぐ。衣囊を担ぎ駆け足でダイハツの中に乗り込み、沖に停泊している輸送船

に乗る。この船は貨物船で1千ト位なもので、下部には窓が無く船底に収容された。中甲板には予科連の集団。輸送指揮官は、海軍中尉一名、少尉二名で、商船学校より来たのが上手に操作しているが、緊張している様子は、隠しきれない。出港と同時に第一警戒配備が発せられ、豊後水道から佐田岬を過ぎたころ、波が荒くなり、行き先の分からない航海は、堪えがたい不安と、死への旅立ちのようであった。敵の魚雷に見舞われたら一瞬で轟沈する。飛行機で機銃を撃たれば、薄い鉄板に穴が空き、浸水して海の藻屑と化すであろう等、不安であった。四国の沿岸を通り、岩陰沿いに進んだ。夕方高知県の宿毛湾に着いたが、そこで皆ホッとして荷物を背負い上陸した。正門は海の棧橋を渡った所であり、第21嵐部隊と木の板に墨書してある。

特殊潜航艇・震洋艇（ベニヤ板でつくったモーターボート）は前部に爆薬を積んで時速80kmで体当たりする特攻兵器。伏竜隊は、4m位の竹竿の先端に信管15kgの爆薬を付け、潜水服を着て海岸沖に待機し、敵が上陸してくれば、棒の先を船底に当て自分もろとも爆発するもの。回天は、魚雷に一人の人間を乗せて体当たりする兵器。この合併した基地が、21嵐部隊であった。それぞれ部隊別に分かれ、小学校、民家、海岸に兵舎を建てて居住する。伏竜隊は、哀れであったが、彼らは平然として海岸に向き、訓練に励んでいた。自分の隊は、本部

で艇待ち。何時のまにか白飯。吊り床は無く三枚の毛布で眠る。整列無し。毎日のんびりした日々だったが、七月、突然米軍は宿毛沖に突進する予定、艇は湾外、他は陸戦隊となって水際で迎え撃つ、今からタコ壺を掘り棒地雷の攻撃訓練を行うといつて長さ1m幅30cmの木でとびこみ練習をした。その夜、ウイスキー一本大ビン、乾パン袋、実弾十五発、歩兵銃、剣を渡された時、最後を覚悟。

隣の古い下士官が「俺達まだ良いほうだ、敵が上陸すればありったけの声を上げて突撃すれば、楽に死ぬるんだからねえ。俺の同年兵に呉の酒保で会った時、木の鯉船を改造し、20ミリ銃器を船の上部に据え、毎日太平洋の沖まで見張りに行く。五名の乗組員で、巡視艇長は兵曹長一名、下士官一名、兵長三名で、敵発見の場合すぐ無線で知らせる任務らしい。大海原にぼつんと一隻。飛行機でも来れば終わりだ」等話していたが、飛行機に見つかれば完全に死ぬ。毎日死を求めて生きて行くより、すばつと死ぬほうが楽だと。海軍では、いろいろの配置があるものだ。生死は紙一重であり、自分も近く死ぬであろう。死ぬ時は、大声を出して、考える暇の無いまま敵弾に倒れようと思った。朝方、戦闘配置、用具収めの伝令がくる。銃に込めた実弾五発を抜き取り、分隊に帰った。

ウイスキーが半分になっていた。暫く経って先任下士官に呼

ばれた。先任とはその中で相当長く勤めている人で、その上は先任伍長がいるが、十年以上勤め、兵曹長（準士官）にすぐなる人。「広島に新型爆弾が落ちた。広島は壊滅状態だ。状況も知りたいし、呉に帰る気はないか」と打診された。「この基地が好きです、置いて下さい」とお願いした。殴られるかな、と覚悟していたが、ニコツと笑って「よし、深浦分遣隊に行くか。あそこは近く艇が入る予定だから」と言っただけで別れた。次の日、五名が本前に呼ばれた。「転勤用意。荷物を持って集合」と、集合してみると、隊長が「深浦分遣隊に行く。棧橋に魚雷艇が係留してある106号艇に乗船せよ。かかれ」と言う。五人は艇に乗った。本部から将校四人を従えて、司令・小倉中佐がやって来て乗艇した。赤い絨毯を敷きつめて、平安貴族の舟遊びの様な飾りは、司令の為のものだったのだ、と気づいた。艇は、後進微速で棧橋を離れたが、左舷、右舷に四本の魚雷が積んであった。

普通の定期巡航船なれば六十分かかるが、魚雷艇は二十分で着いた。大型モーターボートである。隊に着いて、着任の挨拶をしたが、分隊長は司令の応待でどこかに行き、当直将校が出て来た。少尉であった。「先任下士官、兵舎に連れていけ」と命令し、どこかに行った。兵舎は、小高い谷間の一角に民家があり、其処の家を兵舎に接收したものだ。

この基地は、特殊潜航艇専門であり、油まみれの服を着て動き回っている集団と、湾内を広くする作業員集団に分かれている。作業員集団は、三百人位居たであろうか。補充分隊で、二十人が一班となり、予備役で招集された上等兵曹、一等兵曹が班長となり、あと隊員は一等兵で、つるはしを持ち、掘り出した土を運び、基地作りに懸命であった。彼らは、親、兄弟、自分の子供、嫁がおり、幸せな生活をしていたが、召集令状によって軍人になったのである。

次の日から、小高い丘に機銃隊があるので応援に行け、と言われ、一人で行った。20ミリ機銃が台座に取り付けられ、偽装のため緑の木が掛けられているので、注意深く見なければわからない。名札を見て、岸本と書いていたので、敬礼し、「岸本上曹、応援に来ました」と言う、対空戦闘の時の退避壕を掘っていた。壕に入り休憩だと言うので、その場に座った。何を話したか、暫く経って僕と同じ位の子供が居る事、田舎で百姓をしていたこと、青年団に入って同じ部落の女を好きになり、結婚して二人の子供ができ、上の子は十五歳になるとか。上等兵の人は、商売をしていたが、赤紙が来て此処に来たのだそう。徴兵検査で甲種合格となり、三か月、海兵団で教育を受け、予備役として帰り、再び招集されたとか。子供も二十歳、十七歳、十三歳と嫁がおり、嫁の実家で百姓を手伝って子供を育て

ているのだとか。戦争の非人間性、国家権力の恐ろしさを知った。ここには、十人位の兵隊が居たが、のんびりしていた。

自分が鍬を持って四、五回掘ると、すぐ「交代します」と言うので見るだけだった。

次の日も晴天であった。丘に着くと、空襲警報のサイレンが鳴り響き、高射砲、機関砲もあったが、対空戦闘の号令も無く、撃ちかた用意の号令もない。総員退避の号令は、本部に出たらしいが、高台では孤立班長判断である。東の高台から艦載機が低空で飛来して来た。東の集落に爆弾が投下され、ずしんという音と共に黒煙が上がり、一、二、三個の爆弾を投下して、こちらに向かってくる。低空であり、丘すれすれの飛行であった。「撃ちましょうか」と言うと、「待て、撃つな」という指示。二回旋回して来たが、抵抗しなかったため、それまでであったが、搭乗員の顔がはっきり見えた。小型の艦載機も地上すれすれで見、良く気付かれずにすんだ、と幸運を喜んだ。機銃隊には、四日位で、決戦の日が近づいた、水際にて迎え撃つ、という作戦計画で、機銃隊の下の沿岸警備を自分と、もう一人の兵長に命令された。夕食後、鉄砲に実弾五発を装填し、予備の弾十発を弾庫に収め、腰に剣を付ける姿は陸戦隊のようであった。海岸は広い、何処に居ても指定は無い、暫く田舎の話をし、海を電池で照らすと、魚が寄ってくるのを発見。次の日より魚釣り

で、一人は見張り。戦時の緊迫した空気の中で、一時の生をあじわう。ある昼頃、大きな炸裂音がした。東の丘に落として去った不発弾の爆発だとか。

地元の高学年の生徒が農業実習に行き、帰り道の山に不発弾を発見。教師は、近寄らないよう厳重に注意して、引率して帰ったが、四、五人の生徒は、再び鍬を担ぎ山に向かった、不発弾の上に乗る「鬼畜米英」と叫びながら、鍬の頭で殴り続けた時シュツシュツという音がしたので、二人は「逃げよう」と言いながら走って逃げた。後の者は、止めず「鬼畜米英」と叫びながら続けたという。麓に二人が辿り着いた頃、大音響とともに三人の命は、爆弾と共に永遠に消えた。近くの木に肉片が付着していたが、誰のものか。

八月十五日朝、沿岸警備の任務を終え、本部に銃剣を返し、兵舎に帰り仮眠をしていると、何だか慌ただしい空気になっている。暫くして、拡声器より、正午重大な放送があるので全員本部前に集合の伝達である。戦備作業中止。そのうち。同年兵の一人が、本部で将校がひそひそ話していたが、戦争が終わったらしい、特攻隊は沖繩に行き、重労働をさせられるらしい、と、日本が負ける事は考えられない事であったが、朝からのんびりしたというか、静寂な感じに変わっていた。正午全員本部広場前に集合したが、特潜関係は、六、七十名位で、将校や上

級下士官の姿は少なく、ラジオも雑音が多く、只 天皇の声で「堪え難きを堪え、忍び難きをしのび」とだけ聞きとれた。「皆、冷静になって行動するように」との放送があり、各班ごと復員手当てを受けとり、逃げる様に基地を去った。

平素より意地悪い上官の姿は、敗戦と共に去ったのだろう。軍医中尉と呼ばれ、終戦処理、残務整理に残ってくれ、と言われ、十一月一日まで、軍籍に身をおいた。時に十七歳、高校二年の歳である。

戦争の恐怖、殺しあい、死に直面した時の放心状態。自分の青春は何だったのか。子供の頃から、電気の集金人を志し、軍人となったが、戦争はその夢も希望も奪った。

お国の為とは何だったのか。国策にそって生きた責任は自分にあるのか。自分の特技は人を殺す為のもの以外何が残るだろうか。色々考え、忠孝一本の道徳を教えこまれた教育が、いかに人間形成の重要な柱になっていったか、教育こそが自己開発の原点である、と。過ちは二度と繰り返してはならない。戦争を憎む。平和な社会、家族の中に暮らす土台は教育であり、過去の歴史の反省の上にたって立ち上がる、と決意し、教師となった。子供達が、平和で幸せに暮らせるように、今も祈りながら……。

昭和三十年より、四十二年間の教師生活を終え、時代の翻弄

を乗り切り、幸せの今を吟味。



潮岬空襲、疎開、終戦まで

お婆さん(瓜田貞)の体験

裳部みづほ(東倉治)

(一)

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃で第二次世界大戦の火蓋が
きられた。

国民は敗戦のどん底に泣く日の来るのも知らず、ただ軍と為政
者に引きずられ暗黒の世界へ第一歩を踏み出した。

それから三年余り経った昭和二十年六月二十三日、潮岬も空襲
に見舞われた。そのころは敗戦も色濃く、食料、思想、言語いろ
いろの統制もますます厳しくなってきた。

幼い時、潮岬名産と誇るより 上野の芋食い とからかわれた
さつまいも供出などで不足するようになった。芋、麦、野菜を
作っても供出するので、私たちも満腹で栄養十分とはいかなかつ
た。

私たちの身边から、父は戦場に消え、夫も妻や子供を残して戦
場に、息子は母を呼びつつ若く散り、兄弟、親戚、知人は還らず
という避けられない戦争には悲しみが続いた。

国民も次第に戦争の泥沼からはい上がりた、戦争は最大の罪
悪だという思いや意識も出たが、それを口に出したら非国民とい

うレッテルを貼られ、思想言論の統制に引っかけりどんな恐ろし
い目に会うかわからぬので黙々と働いた。それで私は、「戦争は
早く終わって欲しいなどと言うなよ」と小声で先ず自分に言い聞
かせ、子供たちにも言い聞かせた。軍や為政者の批判などはもつ
ての外だった。

食事も、今のグルメ時代に想像もつかぬ粗食に加えて食糧の不
足を辛抱した。今の人は栄養のとり過ぎで肥満になるのを嫌って
節食したりするが、当時は栄養はおろかカロリーまで足らず、栄
養失調という症状まで出てきた。

病人は特にかわいそうだった。少し重い病気となればよい薬は
なく、食事は病人に合う物は一品もなくて死を待つばかりだった。
私の叔母も病死した。配給の大豆粉やコウリヤン粉のだんご汁は
喉に通らないと言い「せめて茶碗一杯の米のご飯を食べて死にた
い」と言ったそうで、私はその悲しい言葉をよく思い出す。

食料を作るものは足りなくても工夫して生活するが、作ってい
ない人たちは筒の皮をはぐように身边の物、着物などを食料に替
えていわゆる筒生活をした。また、足らぬ食料を家族で分け合っ
て命を繋ぐので、家族の間でも不平不満は出て、それが重なり、
とうとう嫁さんが離婚してしまったという家もあった。平和で衣
食が足りておればこんな事は起こらないはず。

当時を詠んだ私の駄作ですが

「勝つまでは」を口に唱えて子を育て

飢えの我慢を日に夜に強いき

当時の母は、涙を飲んで育ち盛りの子やいたいけな幼子に飢えの我慢を強要した。

(一)

こんな状態の六月二十三日午前、潮岬の東地・上地・西地のお寺までの線に沿って爆弾は投下された。

生きた心地もなく壕の中におったが、爆撃はやんだので私達は壕から出て驚いた。

私家の屋根天井は爆風で飛んで失って、一面瓦礫の山である。前の家と後ろにも爆弾が落とされて屋根が飛び、新吉へ瓦が集まったのだ。私宅のすぐ前の家も吹き飛んだ。この爆撃でまつよもの両親は亡くなり、壕から女の子たちが出てきて泣きながら、瓦礫の中を動いている。そこへ串本商業学校から次男の洋さんが、鎌を肩にかついで（そのころは授業よりも作業が多かった）、ひよっこり帰宅した。私たちは洋さんに何と話しかけてよいか判らず、ただ無念の涙をのんだ。前の家の子供たちは、きょうだい離れにならぬよう、みんなは母親の里へひきとられた。(※①)

この空襲で老人子どもを交えて二十名近くの人々が亡くなった。道をへだてた斜め前の家に、ふと目をやると、その家も吹き飛び、瓦礫のなかには、その家のおじさんが農耕用に飼っていた牛を助

けだそうと連れ出したのだろうか、どこへも動けずその場に呆然と牛と共に立っていたのが私の目に焼き付いた。

空襲の瓦礫の中に

牛引きて立つ人

今も まなこ離れず

このおじさんも今は故人となったが、その姿が浮かんでくる。

(二)

日本全国の空襲はますます激しく、焼け野原となる町も多くなった。潮岬も全国の町と同様、各自縁故をたどり、疎開は進み出した。

私も子どもたち（衣子十二歳 まほり九歳 みづほ三歳）を連れ、古座川町檜山へ行くことに決まった。学校は高池小学校の分校で、児童数は十名余りだったと思う。次女のまほりの幼いとき、守（子守）をして、世話をしてくれた。たみえさんが檜山の人で、彼女の両親が檜山のクラブを借りてくれた。七月に入って檜山から迎えに来てくれて、七月十日出発することになる。

私は妊娠中で、店も無く医者も勿論おらず、産婆さんもない所へ疎開するのはとても不安だった。世話をしてくれた前さんのお母さんは「医者も産婆も居ないけれど、私たちは皆無事に産んだのだからみんなの手伝ってあげる。だから心配ない。」と力づけてくれたので、私もその気になった。

私たちはぐずぐずしては居られない。敵が上陸するという噂さえある。今、家族と別れたら再会出来るかどうかかわからないが、涙を払って、子どもたちに父と祖母に別れの挨拶をさせた。

当時、お父さんは串本小学校に勤務していた。夜、空襲の警戒警報が発令されると飛び起きて、自転車で串本小学校へかけつけた。途中、うま坂で上空の敵機を見て、道の側溝に何度も伏せた事もあったという。空襲時には、いつも父は家におらないが、子どもたちも私も、それを当然と黙っていた。戦後、戦争の話になると、お父さんは「人に誇ることは何も出来なかったが、空襲の時避難するのに、子どもを一人も死亡させたり、怪我させなかったのは、一番嬉しく幸せな事だった」と言うのは口癖だった（警報が鳴ると、学校に駐屯していた兵隊さんたちより、子どもたちの方が早く上手に避難したそうだ）。疎開地の檜山では空襲はなかったが、わずかの食品をどんなにして子どもたちに食べさせるか、山坂背負って、岬から持ってきた食料をどんなにして長持ちさせるかは悩みの種だった。大雨が降ると道が崩れ、配給品さえ届かない状況だった。

衣子とまほりは学校へ行き、家に残るみづほは、昼前私の炊いていた薪の火が消えるとお粥が炊きあがると思うのか「お母ちゃん、おふう消えた。はよ食べよ！」と責める。お粥は米を少量入れ、水で量をふやしているので、お米は下へ沈み、一緒に食べな

いと、学校から帰って来て食べる一人にはお湯ばかりになる。毎日空腹を訴える三歳の子をふびんに思うが、与えるおやつもなく我慢させるのに一苦勞の毎日だった。（※②）

お粥のおかずと言えば、河原へ行く道に自生している生姜の茎の柔らかい部分を細かく刻んで、家から持ってきたお味噌に混ぜ入れた（これは、今でも少々美味しらしい）。

七月末日、実家からの手紙で、兄（唯一郎さん）が戦死との知らせが届いた。当時、安宅商事の北京支店長だった兄は、一時帰国するつもりで、子どもたちに土産を買い求めていたらしいが、戦況が悪化して足止めされ、現地召集をうけた。

兄は部隊長として出動したが、八路軍に包囲され、武運つたなく戦死したとの事だった。私はその場に泣き伏した。名誉の戦死等という言葉は出ない。ただ、兄を思い、老いた父母を思い、悲嘆に暮れ、泣き続けた。（※③）

檜山では、新聞もなくラジオもなく、確かな情報の入るすべはない。そんな状態で八月に入り、六日、七日と、過ぎてから高池局から来た郵便配達のおじさんが「今度、広島へ落ちた爆弾は今までのと違うらしい」と話してくれたが、私たちはそれがどんな爆弾か、原子爆弾という名も知らずに過ぎた。三、四日してから、長崎へも落とされ、今までと違った相当威力の強いものだと聞いた。

昭和二十年八月十五日

当日、朝早くから、檜山分校では松根油の原料を供出するのに、五、六年の子供たちは、山坂約16kmの道を、楠という地区まで「兵隊さん、どうかこれを油にして敵を打ち破ってください」との切なる願いを込めて重い松の根を運んだ。衣子も五年生なので仲間入りをした。とても暑い日だった。弁当は、麦を主にしたご飯に、一坪位の空き地で作った茄子を採り煮しめて入れ、混ぜご飯にしたのを持たせた。背中へ風呂敷で包んだ弁当をしばらく家を出た。久々にご飯を奮発したが、弁当はその日の暑さと背中の中くもりで、むれて腐って食べられなかったらしい(※衣子さんの記憶では、家を朝出て、峠まで行ったらしんどくて動けなかった。峠で弁当を食べたらやっとなつたという記憶が残っているらしい)。

暑さと重労働と空腹で疲れ切つて帰った娘は、その夜 高熱を出し大変苦しんだ。

翌日、郵便配達のおじさんの話では 昨十五日 天皇陛下はラジオを通して無条件降伏を放送されたとの事。子供たちは何も知らず汗みどろになり「兵隊さん勝つて下さい」の一念で運んだあの松の根も不要になったのか。

国民一人一人子どもに至るまで、「勝つまでは」を合言葉に苦しみ悲しみに堪え各自の仕事に励み、夕べになると今日も生き延

びた事が胸にしみる毎日だった。

突然、無条件降伏と聞いた時は、いろいろな感情がこみ上げてその場で泣いた。廻りの人たちも泣いていた。長かった戦争の傷跡が心の中一杯に広がるが、もう今日から日本中何処も爆撃されることはない、という安心感で大空を見上げた。

但し、日本は敗戦だ。アメリカによる占領となれば国民はいつたいどうなるのだろうかという不安が湧く。郵便配達のおじさんは流言飛語もあり、実際この後どうなるかわからないので、檜山で今しばらく様子を見るようにすすめてくれた。私もそうするつもりにしたが、九月になり父親が迎えに来ると、子供たちはすぐに帰る気になり、私たちは、檜山の人たちに感謝の心一杯で潮岬へ引き上げる事になった。

その後、まほりは成人して保健婦となり、三、四年前でしたか、古座保健所から檜山へ出張した時、檜山の人々は集まってくれて、私たちの疎開当時の話も出て、なつかしく嬉しい会合だったと電話してくれた。

(四)

私たちの疎開中、潮岬では艦砲射撃を受け、日夜死の恐怖におびえつつ食糧増産に励み続けたらしいが、八月十五日より、爆撃の恐怖から開放され、敗戦国日本の険しい道を踏み始めた。

アメリカからマッカーサー元帥が進駐して軍国日本のすべて

の改革は始まる。軍隊はなく、教育は六・三・三に、戦争関係は改造され、解体され、処罰を受けた。平和憲法の公布となり、戦争を放棄した。平和憲法の門出だが、戦争の荒廃から復興するのは容易ではない。食料も物資も闇取引の対象となり、あるところにはあるが一般の国民は欠乏の生活である。でも戦争放棄は何にもまさって嬉しい。そして平和憲法は国民の幸せを守るのだ。

敗戦後、日本は欠乏の中に国民一人一人の勤勉に支えられ、すべての事に世界が目を見張る発展を遂げた。ただし四十年余経過した今、私たちが最大の犠牲をはらった戦争体験も、風化しつつあるのを心痛するこの頃だ。

私たちの住む紀伊半島にも原子力発電所を誘致して、町の活性化をはかるうという動きがでてくる。どんなに安全をアピールしても今後絶対安心という保証はないはず。たびたび原子炉の故障は報じられているが、その度に、漏れた放射能は人体に影響するほどのものではないと付け加えて、住民に安心感を与えている。ただし学者の話では日本の原子炉は老朽化しているのが多いとのこと。いつも、人体に被害のない放射能漏れ程度の事故に限っているとは思えない。事故の他に使用済み核燃料の処置、老朽の原子炉の解体など私たち素人には計り知れぬ困難もあると思う。こんな危険なものを絶対に子孫に残したくないというのは、母、祖母の真実の願いだと思う。

「紀伊半島に原発はいらない女の会」の意見に私も双手をあげて賛成だが、私は心身ともに老化して何のお役にも立たぬので、子どもの命を育て守るお母さんたち、これから母となる女性たちにお願いでその活動を期待している。

戦争体験第一号に執筆された方々の生々しい体験談に感動し、私の羅列を恥ずかしく思いつつペン走らせました。

戦争を生きて、

軍拡に金をついやして 何になる

戦争を生きし この身が 知れり

この切実な思いが今も私の心の奥深く残っている。

(瓜田 貞)

後記

今年には戦後六十四年、そして、憲法改正の動きが一步一步現実となつていく。私の高校時代、多分、学徒動員で戦場を体験してきた先生が、戦争の話は何もしないのに憲法前文と九条の戦争放棄の条文を生徒全員に覚えさせた。同窓会でも憲法前文を朗々と読み上げる人もおつたものだ。この平和な日常でも、新聞などをよく読んでみると、戦争前の動きが身のまわりにひたひた押し寄せてくるような感じもする。母(瓜田貞)がこの記録を書いたのは、五年間家族が住んでいた日置川町に原子力発電所の計画が持ち上がり、日置川町のお母さんたちが反対運動をして、計画を中止

させた頃です。ノートにはその頃の新聞の社説や天声人語が写されています。ぼけ防止にしていたのでしょう。戦後四十年、今から約二十年前です。その時は、母のとらえ方に如何にも元教師らしいと反発しましたが、今、この母の記録や願いを、孫たちに読んでもらいたいと、ノートをそのまま、記録しました。孝行のなにも出来なかった娘の願いとして……。

※① この「まつよも」の家は長男のおじさんが結婚するまで、そのままだった。家の敷石などが残っており、秋になると赤とんぼが沢山飛んできて、私たちはすすきの中、とんぼとりに夢中になったことを覚えている。

② 「おふうが消えた、早よ食べよ」で困った話は、私が結婚するまで何かにつけて聞かされた。そのために、食べ物いやしく食いしん坊になった

③ 伯父さん(唯一郎さん)のお骨を串本駅のホームへ、身内の人、親類の人たちでお迎えに行ったとき、母と従兄弟の生死のわからなかった本坊の叔父さん(小川哲郎さん)が、伯父さんの遺骨と一緒にホームに降り立ったそうだった。その時のホームの様子も、子どもの頃、何回も聞いた。(本坊の叔父さんは私の高校時代の教頭先生)

小川先生も、南方戦地の激しかった戦争体験を英語の本にし、それを中学校の教師になった教え子(私の同窓生)が

副読本として利用したとのこと。

尚、唯一郎伯父さんの出征時の記録は母方のお祖父さんが残していた。この貴重なノートは、おじいさんの残してくれた、たった一つの遺品だと、母は大変大事にしていた。

簗部みづほ記



私の第二次世界大戦争の体験

吉川勝彦(森南)

私は、鉄砲を持つて戦地にいける歳ではありませんでした。

昭和十九年四月に小学校六年生になり、戦争も末期で、大阪市東成区に住んでおり田舎に縁故先のない児童は強制的に疎開させられることになり、家族は祖母、両親、子供は六年の私、四年と五歳の弟、一年の妹と七人家族でした。奈良県の桜井町（今の桜井市）の、おだまき旅館の二階に私と妹が、おとなしい組の一年生から六年生までの男女五十名の中に、四年の弟は隣村の天理教の教会にと兄弟離れ離れで、親元離れての集団生活が始まりました。

食糧は乏しく空腹を抱えながら、授業は地元の小学校へ通う日々でした。放課後、宿舎に帰る途中に、収穫が終わったサツマイモ畑で掘り残しのクズ芋を拾って帰り、洗って生でかじったり、遊び時間に山からどんぐりを拾ってきて、それを粉にしてふりかけにしたらご飯の足しになると、女生徒が言い始め、それに賛同した者が集団中毒で三十人ほどが枕を並べて四〜五日寝込んでしまったり、この地方は冬柿の産地であり、隣村の天理教教会に

弟に会いに行き、帰りに柿畑を通りかかると、大きく赤く熟した柿を見るとついつい手が出てしまい、柿泥棒をしているところを持ち主に見つかり、先生から大目玉をもらったり、また野外訓練の時、急にサイレンが鳴ったと思ったら、バリバリとすごい音がし敵の戦闘機からの機銃掃射に会い、先生の伏せの号令よりも早く地面に伏せていました。（奈良県にアメリカの攻撃が有ったことは、よく知られてないようです）。この時犠牲者は無かったが、

年も明け、昭和二十年二月に小学校卒業と中学校受験のため実家に帰り、市立天王寺商業の受験勉強にと励んでいたところ、三月十三日にB29、二百七十四機の大空襲があり、大阪市西部が、千七百七十三トンの焼夷弾を落とされ、広範囲に民家が焼かれ、この大空襲のため中学の入学試験が無くなり、願書を出した学校に全員入学出来ることになりラッキーでした。

入学はしたものの、授業はほとんど無く、陸軍の兵隊が来て竹槍を持つての教練に明け暮れして居りましたが、六月一日朝より又B29、四百五十八機の大空襲になり、我が家にも危険が迫り両親は自宅に残り、自転車の荷台に布団と少しの着替え、ハンドルに傘を下げ、七十歳の祖母と五歳の弟と三人で、あても無く避難を始め、鶴橋辺りに来た時、焼夷弾が一メートル先に三個落ちてきて火花を吹きはじめ、慌てて自転車を放り出し、祖母と弟の

手を引き桃谷方面へ電車路を歩いていきました。入学したばかりの母校天商の燃え上がっているのを横目に見ながら、天王寺方面に歩いておりました。その頃には、空は黒煙で、もう夜のように暗くなっており、家を出てからの時間の経過も分からず、昼ごはんも水も無く空腹と疲れとでへとへとなり、とに角、家に帰ろうと引き返しました。鶴橋で自転車を放り出した所へ戻って来たら自転車と荷物はそのまま有りましたが、火災が終わる頃には必ず雨が降ってきますので、傘だけが盗られていました。自宅に帰ってみると、焼けずに残っていたのでほっとして、避難疲れもふっ飛びました。

それからの日々は、校舎も全焼しており、学ぶところも無く、焼け跡に集合してはスコップを担ぎ、周囲の焼け跡整理が日課となり、昼飯にさつま芋のつるを乾燥粉で小さな団子を二個の支給だけで空腹を抱えながらの作業でした。

資料によると六月十五日四百四十四機、焼夷弾三千五百二十七トンの投下、六月二十六日爆弾千四百四十トン投下、七月十日百十六機、焼夷弾七百七十五トン投下、七月二十四日百十七機、七百四十トン投下。このように大空襲に遭っていたが、幸いにも自宅は焼け残りの地域でした。

日増しに空襲が激しくなってくるので、年寄りと子供を抱えた家族には、行政より一刻も早く疎開させよと厳しい通告が有った

ようで、父も追い詰められ、北海道開拓帰農者を募集して居たように、大阪を離れるには、これに応募するしかないと決心したのでしよう。

八月十三日に我が家を後にしました。終戦三日前のことでした。大阪駅より出発、客車は何両であったか覚えていませんが、千人位の団体でした。進路は裏日本の北陸本線で、北海道へのろのろとの旅でした。十四日の夕方秋田市駅に着いたとき、下車を命じられ、秋田女学校の体育室に容れられ、布団も無く、衣服を着たまま床にごろ寝していたら、夜の何時頃か空襲警報のサイレンが鳴り響き、避難するまもなく大きな爆発音がして、廊下に出て見ると、大変大きな火柱が二本夜空に燃え上がっていました。秋田には油田があり、その油田に爆弾攻撃を受けたとのこと。爆弾攻撃は油田だけで、市街地には被害が無く朝を迎えました。しばらくして、全員集合の号令があり、ラジオから天皇陛下の終戦の玉音放送が流れてきました。あちらこちらですすり泣きの声が聞こえてきましたが、私はよかったこれで戦争が終わったとほっとした思いでした。

家財道具は北海道開拓地に送付されているので、戻ることも出ず、十七日に秋田を出発し、北海道開拓地に向かいました。

それからは戦後の生活の苦闘が始まりました。

交野の平和と戦争関連モニュメントから



平和の鐘 (いきいきランド前広場)



「平和と人権を守る都市宣言」碑 (いきいきランド前広場)



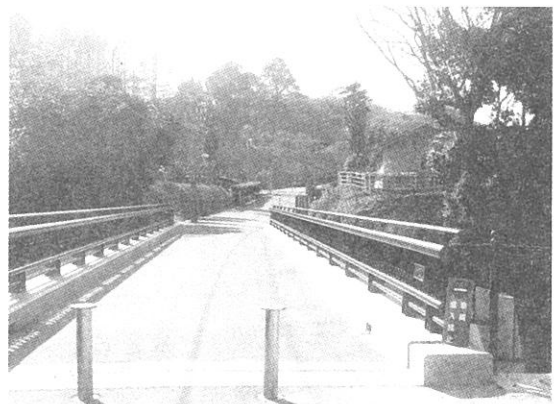
戦闘機「飛燕」発掘物展示 (いきいきランドロビー)



中村中尉鎮魂碑 (星田北6丁目)



片町線陸軍専用香里側線跡 (星田北)



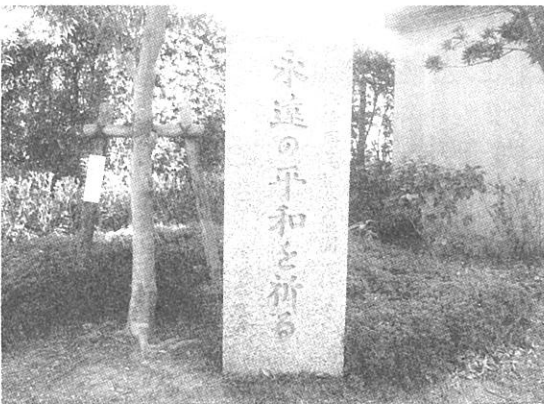
私市興亜拓殖訓練道場跡 (大阪市立大学理学部附属植物園)



桂木斯小学校記念碑 (平和台霊園内)



忠魂碑 (私部会館横)



交野市原爆被爆者の会「祈念」碑 (ゆうゆうセンター前庭)



「愛と平和」碑 (ゆうゆうセンター前庭)

へいわ じんけん まも と し せんげん
平和と人権を守る都市宣言

あなたの^{つよ}強い^{ねが}願があるから
きっと ^{かく}核や^{せんそう}戦争はなくせる

あなたの^{あたた}暖かい^{あい}愛があるから
きっと ^{さべつ}差別や^{ぎゃくたい}虐待はなくせる

^{かたの}交野の^わころは「和」

「^{へいわ}平和と^{じんけん}人権」はその^{いのち}命

かけがえのないものを
あなたと^{とも}共に^{まも}守り^ぬ抜きたい

そして さらにその^わ輪が

^{ぜんちきゆう}全地球に^{ひろ}広がることを^{ねん}念じ

『^{ひかく}非核・^{きょうせい}共生・^{ひぼうりよくとし}非暴力都市 ^{かたの}』

を ^{せんげん}ここに宣言します。

平成 13 年 11 月 3 日

交野市

City Declaration on Observance of 'Peace and Human Rights'

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is "WA" or "Peace."

The desire for peace and the respect for human rights are at
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby
declare Katano to be a

"Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity."

November 3^rd, 2001

City of Katano

あとがき

光陰矢のごとしと申しますが、「平和の礎」の第一集を発刊して、早や三年有余を経過致しました。

この間、編集委員の中から、体験者の記憶が薄れていく事を慮れる声があがり、第二集の発行を決定いたしました。『広報かたの』で、戦中・戦後の体験記の原稿依頼を再三掲載して頂きましたが、投稿が少なく交野市在住の方々による編纂のみにたよらず、他市からの投稿も受け入れ、編纂させて頂きました。

改めて年月の流れが人の記憶を薄れさせ、書き留めることの困難さを知らされる思いです。しかしながら編集委員会としては、これからも「戦争の無い平和の尊さ」「生命の大切さ」をいつまでも、子・孫たちに語り伝えてゆく責任があると感じていきます。原稿をお寄せ下さった皆様に心より御礼申し上げます。

編集者 平和継承事業部会

編集委員 可児 義明

〃 水上 隆邦

〃 住井 麗子

〃 玉井 八恵子

事務局 樋口 和美

『平和の礎(いしずえ)』

— 交野市在住者の戦争体験集 —

平成二十一年六月発行

発行者

交野市『平和と人権を守る都市宣言』を
進める実行委員会

交野市私部一丁目一番一号

電話〇七二一八九二一〇二二一

印刷 株式会社 加地

電話〇七二一八九二一〇〇〇一

